

歌人としての賀古鶴所

——「鷗外の親友」の文学的素養——

島内景二

1 はじめに

賀古鶴所^{かこつるど}は、森鷗外の帝国大学医学部時代の同級生であり、卒業後も永く親友であった。鷗外の自伝小説『キタ・セクスアリス』では「古賀」というネーミングで登場している。また、鷗外の死の床にあって、もはや字の書けぬ鷗外に替わって、「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」という有名な文を含む遺言を筆写した^{ことでも知られる。}

我が国の耳鼻咽喉科の草分けでもある。我が国最初の耳科専門の医学書である『耳科新書』（明治二十七年）は、「賀古鶴所編」と銘打たれている。明治三十年に吐鳳堂から出版されたこの書の増補改訂版は、東京大学付属総合図書館などに所蔵されているので（図書請求番号、V78・5）、容易に実物を手に取って閲覧できる。なお、国会図書館には、明治二十七年の初版も明治三十年の吐鳳堂版もあるが、いずれもマイクロフロッピーによる閲覧である。医学書であるが、巻頭に、賀古が親しくしていた元老・山県有朋の毛筆識語が麗々しく掲げられているのが印象的である。達筆（というか癖のある字体）なので、読みにくい、「寄耳聴」という漢字三文字が揮毫されているようである。

我が国における耳鼻咽喉科の開業の祖とされる金杉英五郎と並んで、賀古はこの専門分野の創成に貢献したことになる。

ちなみに、同時代の代表的な歌人であり、国文学者でもあった井上通泰（柳田國男の実兄）は、眼科医であった。医学者にして文学者でもある鷗外や通泰と親交を結んだ、賀古鶴所。ところが、彼の文学者としての側面は、これまでほとんど考慮されてこなかった。「鷗外の親友」「豪放磊落な男気の人」という一言（イメージ）で片づけられてきた賀古鶴所。にもかかわらず、鷗外ほどの人物が一生の友として、家族以上に信頼を置いた賀古鶴所。

一体、賀古鶴所とは、どういう男だったのだろうか。「文学者」としての賀古鶴所の心のありようを、覗き込んでみることはできないことなのか。それは、そのまま賀古を信じた鷗外の心を照射するものではなからうか。

本稿は、東京大学付属総合図書館に所蔵されている『常磐会詠草』全五巻（図書請求番号、E31・360）から、賀古鶴所の残した短歌を抽出し、それに分析を加えることを、最大の目的とする。また、『鷗外全集・第二十六巻』に収録された鷗外の賀古鶴所に宛てた膨大な書簡の解説を通して、二人の友情の実態を見届けることを第二の目的とする。

これらの作業を通して、鷗外が惚れ込んだ賀古の人間性と文学性を、一端なりとも垣間見ることができれば、と思う。

なお、東京大学付属総合図書館所蔵の『常磐会詠草』全五巻には、すべてに「鷗外蔵書」の印が押されているので、森鷗外の旧蔵書であることがわかる。この活字本の全五巻は、常磐会における「入選歌」と「次選歌」とを掲載した秀歌選（アンソロジー）である。

ちなみに、「常磐会」の実際の会の席上において、当日の参加者に配られた無記名の作品一覧は、文京区立鷗外記念本郷図書館に所蔵されており、それを閲覧すれば、選者の誰がどのような批評を述べたかをおおよそ辿ることができる。ただし、常磐会の全体の完全な記録にはほど遠く、長い期間にわたって開かれつづけた常磐会の初期の会合のものが多く、残りの大部分は、惜しまれることに散逸してしまっている。残された幸運な資料には、当日の常磐会の席上で記録した鷗外の貴重な書き込みメモが含まれる。

この貴重な資料が文京区立鷗外記念本郷図書館に収蔵された経緯を関係者から伺ったところ、古書店で売りに出ていた『常磐会詠草』（鷗外の自筆書き込みメモ付き）を、森鷗外記念会の会員諸氏が私費を出し合って購入して、図書館に寄贈されたの

だという。それが、残念ながら「断簡」だったわけだ。本来は一对であるべき『常磐会詠草』（本選における入選歌）とメモ（予選を通過した全作品の一覧表）とが、東京大学と鷗外記念本郷図書館に分割されて所蔵されていることになる。ただし、既に述べたように鷗外記念本郷図書館所蔵の「メモ」も、完全なものではない。また、東京大学に保存されている活字本『常磐会詠草』の原本に当たるもの（印刷以前の手書き清書）も、第一巻に該当する部分のみが鷗外記念本郷図書館に所蔵されている。

やや先走ってしまったかもしれない。まず、『常磐会詠草』とは何かということについて、説明しておこう。鷗外と賀古は、明治三十九年六月十日の夜、小出燦・大口鯛二・佐佐木信綱・井上通泰を浜町一丁目の「常磐」という料亭に招き、新しい短歌の会を興すことを諮った。当時の短歌界は、旧派（江戸時代の桂園派の流れ）と新派（正岡子規の根岸短歌会など）とに分裂しているので、その調和を図らねばならぬのではないか、というのである。なおかつ、元老・山県有朋を会の頭に戴くことにして、権威付けもねらった。山県有朋は歌が好きだけでなく、斎藤茂吉が彼の作風を称賛したすぐれた歌人でもあった。

明治三十九年九月二十三日、第一回の会合は、飯田町六丁目の賀古鶴所の邸で開催された。以後、月一回の割合で開催された。毎月、第三日曜の午後四時から開かれることが多かったという。会場は、賀古邸と山県の椿山荘とで交互に開催していたようだが、時には「八百膳」などの料亭で行われたこともあった。

当初は、小出・大口・佐佐木・井上の四人が選者を務め、後に鎌田正夫・須川信行が加わった。選者の死去に伴う変更である。

常磐会は、「題詠」を基調としている（ただし、常磐会の末期になると、「当座」すなわちその席上での詠作もなされるようになったようだ）。あらかじめ予告された題（毎回三つずつ提示されている）に関して作品を詠んだ会員は、まずその作品を選者の一人に送る。

各選者は、一回につき「三十首」まで予選通過作品として、「常磐会」の会合に持ち寄る。初期においては選者は四人だったので、三つの題で合計百二十首の歌が予選を通過して、持ち寄られたことになる。ただし、詠みやすい題もあれば、詠みにくい題もあるので、一つ一つの題についての作品数は、統一されておらず、ばらばらである。この段階で落選する作品も、多かったであろう。

本選に当たる常磐会では、無記名の短歌作品が羅列してあり、選者の自由な合評

形式で、入選作を決定する。当初は「入選歌」のみが活字の単行本に印刷されたが、後には「次選歌」も印刷されて顕彰されるようになった。この段階で、歌の作者名が明らかにされる。

このような手順で入選した作品群を一覧したのが、『常磐会詠草』全五巻である。第一篇は、明治四十二年四月、歌学書院刊。第二篇は、明治四十三年十月、聚精堂刊。第三篇は大正元年十二月、第四篇は大正六年十二月、第五篇は大正六年十二月、いずれも聚精堂刊。

鷗外（源高湛）や、その妹・小金井喜美子の作品も、収録されている。なお、『鷗外全集・第十九巻』には、鷗外が常磐会に出詠した短歌作品が、落選作を含めて収録されている。これと、入選歌・次選歌を一覧した『常磐会詠草』とを併せ読むと、鷗外といえども「入選率」がかなり低いことがわかる。

無記名の作品に対する選者たちの合評形式であるからであり、選者の一人でも表現の一部に異を唱えれば、落選するのが普通だった。そもそも、予選を通過するのも大変であったろう。「旧派和歌の代名詞である桂園派（堂上派）の雄である香川景樹の『桂園一枝』の作品ですら、常磐会に出詠されれば、落選する歌が多いであろう」とは選者の一人・井上通泰の回想である。ただし、山県有朋（当初は「椿山荘主」、後には「古稀庵主」）の入選率が抜群に高いのは、彼の場合にのみ何らかの配慮があったことを示すものである。

予選通過の時点で、一人の選者から得点ももらっていることになる。本選で、あ一人の選者が点を与えれば「次選歌」、二人の選者から点ももらえば「入選歌」となったようである。ただし、初期においては、予選に当たった選者も、本選で改めて、自分が予選を通過させた歌に点を与えることもあったようだ。このあたりは、回を重ねるうちに、少しずつ改善して、規則ができあがっていったものと思われる。

さて、このようにして晴れて入選した賀古鶴所の短歌作品を、次に列挙することにしよう。賀古の予選を行ったのは、一貫して井上通泰である。会合において、賀古の歌に票を入れた選者名は、漢字一字で略表記されている。「満点」は、全員の選者が選んだという意味。

念のため、選者の略称を記しておく。

- 小 小出燦
- 井 井上通泰
- 大 大口鯛二
- 佐 佐佐木信綱

鎌 鎌田正夫
須 須川信行

以下の引用に際しては、「変体仮名」のたぐいは、現在通行している仮名遣いに改めた。また、漢字の異体字も、通常の字体に改めたことをおことわりしておく。

2 『常磐会詠草』にみる賀古鶴所短歌作品集

2・1 活字本『常磐会詠草』全五巻による集成

- 第六回（明治四十年二月十七日） 題「鼠」 佐・井
ひめおきし手箱のなかの文がらをいづちねずみのとりちらしけむ
同回 同題 満点
- はしためをあなづりがほに小鼠のかまどのかげに見えがくれする
第七回（明治四十年三月十八日） 題「谷」 大・佐
たにぞこにひつじおひゆくわらはへの口笛さむしあきのゆふぐれ
同回 題「鯨」 佐・大
朝づく日かすめる沖にしまひとつ湧きぬと見しはくぢらなりけり
第九回（明治四十年五月十八日） 題「藤」 大・佐・鎌
まつが枝をかすめて飛びし白鳩のはねやふれけむふぢのはなちる
同回 題「島」 佐・鎌
舟人ののゝしるこゑにいでて見ればへさきに島ぞあらはれにける
第十二回（明治四十年八月十八日） 題「石」 鎌・佐
かた岸のぬるでもみぢちりそめておく霜しろしかはなかのいし
第十四回（明治四十年十月十二日） 題「湖月」 満点
さを鹿のこゑもはるかにきこえてつきかげさびし山なかのうみ
第十六回（明治四十年十二月十五日） 題「壁」 鎌・大
からすなく森のこずゑにみゆるかなゆふ日かゞよふ城のしらかべ
第十七回（明治四十一年一月二十七日） 題「冬月」 佐・大
あびきする子等もたき火をかこみけりかもめの声のさゆる月夜に
同回 題「絵」 佐・大
川ながれ山そばだつとみるほどにつきさへふでにのぼりぬるかな

第二十六回（明治四十一年十月十八日） 題「秋風」 井・佐
水かれし河原をひとはゆきかひてわたらぬはしにあきかぜぞふく

（以上、『常磐会詠草』第一篇』は入選歌のみ掲載）

- 第三十三回（明治四十二年五月十六日） 題「山吹」 次選歌 佐
やまがはに小鮎つる子の笠の上に咲きかゝりたるやまぶきのはな
第三十六回（明治四十二年八月十五日） 題「百合」 次選歌 鎌
おき出でてあさ戸あくれば山百合のたかきかをりぞ内にいりくる
同回 題「橋」 次選歌 鎌
なる神のとゞろくごとくきこゆなり橋のうへゆく小ぐるまのおと
第三十八回（明治四十二年十月十七日） 題「杉」 入選歌 大・須・佐
まがねふくけぶりに枯れぬしらくもの日ごとやどりしたにの老杉
第三十九回（明治四十二年十一月二十一日） 題「柱」 入選歌 大・佐
たゝかひのちまたとなりし跡とへば石のはしらぞひとりのこれる
第四十回（明治四十二年十二月十九日） 題「冬田家」 次選歌 大
畑に出でて大根引く子やいかならむ綿繰る手さへひゆるあしたに
第四十一回（明治四十三年一月二十三日） 題「馬」 入選歌 大・佐
朝ごととわれをおこしゝ馬も老いてゆか蹴るおとぞ稀になりぬる
同回 題「千鳥」 次選歌 佐
たきものゝ香をとめこしか川ちどりおばしま近くこゑのきこゆる
第四十三回（明治四十三年三月二十日） 題「燕」 次選歌 井
起き出でてあさ戸あくればつばくらめ我袖ぬひてよそにとび行く
第四十五回（明治四十三年五月十五日） 題「躑躅」 次選歌 鎌
はるかくと見さくる峰の松がきをかぎりに咲けるいはつゝじかな
同回 題「糸」 次選歌 須
まゆを煮ていととる見ればいたづらにきぬの衣は着られざりけり
第四十六回（明治四十三年六月十九日） 題「瓦」 次選歌 須
ふりたりといへばかはらのかけたるも価ある世をわれやなになり
（以上、『常磐会詠草』第二篇』は、二人以上の選者の加点があれば「入選」、
一人のみの選者の加点では「次選」としている）
第四十九回（明治四十三年九月十八日） 題「述懐」 次選歌 須

生れきてこの大御代にあひながらなすこともなくはてむかなしき

第五十四回(明治四十四年二月十九日) 題「冬原」 入選歌 大・須

冬さればすゝきかれふしひろの原おもはぬかたにうみも見えけり

同回 題「かるた」 次選歌 須

おいびとも老をわすれてとりすゝむかるたぞ春のあそびなりける

第五十八回(明治四十四年六月十八日) 題「水」 入選歌 大・佐

かへりきてゆあみしつゝも思ひけりいくさのにはの水のともしき

第五十九回(明治四十四年七月十六日) 題「夏雲」 次選歌 鎌

うちわたす青田のはてのとほ山のうへにそびゆるくものみねかな

第六十五回(明治四十五年一月二十八日) 題「老杉」 入選歌 大・須・佐

曲玉もほればいづとふをかのべにかみ代のすぎのかみさびてたつ

同回 題「雲」 次選歌 佐

くれぬやとまどのとみれば窓の外の松の葉ごりみぞれふるなり

第七十二回(大正元年九月二十日) 題「泉」 次選歌 大

原なかのやなぎのかげにたちよれば清水わくなり草むらのうちに

同回 題「夏汽車」 次選歌 大

ゆふ立のあめをつきつゝ夏の野をはせゆく汽車のうちぞすゝしき

(以上、『常磐会詠草・第三篇』)

第七十五回(大正元年十一月) 題「市雁」 次選歌 大

いちなかはうつ人なしと雁がねのなきかはしてやひきくとぶらむ

第七十六回(大正元年十二月) 題「波」 入選歌 大・佐

つなぎ綱たゝれて海にすゝみいでし船のへさきにしらなみぞたつ

第八十三回(大正二年七月) 題「夏草」 次選歌 佐

いろいろのはなをさかせて夏草のわれをまつらむ磯のなりどころ

第八十五回(大正二年九月) 題「扇」 次選歌 大

われをまつ人ぞあるらしはしの間にあふぎをならす音のきこゆる

第八十七回(大正二年十一月) 題「紫苑」 次選歌 大

畑中のおくつきどころあれにしもしをに咲きたりをばなまじりに

第八十九回(大正三年一月) 題「冬社」 入選歌 鎌・須

冬枯のいてふの老木さむげにもぬけいでゝみゆるうぶすなのもり

(以上、『常磐会詠草・第四篇』は、開催の月のみで日付は記さず)

第三百三回(大正四年三月) 題「境」 次選歌 佐

かしましくいひ争はでさかひには八重がきゆひてあるべかりけり

第三百八回(大正四年八月) 題「深山」 入選歌 大・須

たにあひのみづはみやまのしづけさをあとに残して流れいづらむ

第三百十回(大正四年十月) 題「木屋花」 次選歌 佐

みづこふとしづのふせやをとふ道にかをりきにけりもくせいの花

第三百十二回(大正四年十二月) 題「獵」 次選歌 大

ふみたてし鳥ははるかにとびさりて犬もぬしをばうとみがほなり

第三百十六回(大正五年四月) 題「耳」 次選歌 大

みゝうとくなりぬる我もつゝのおときけばこゝろの勇みたつなり

第三百十八回(大正五年六月) 題「夏野」 次選歌 佐

たけたかくちがやおひたる夏の野のゆくてふたぎて牛のくさはむ

第三百十九回(大正五年七月) 題「鯉」 入選歌 大・須

一ひらのうるこしめしてふなびとはあみをのがれし鯉をしめり

第三百二十三回(大正五年十一月) 題「冬林」 入選歌 大・佐

こがらしにふきたてられてゆふがらす林のうへにまたもみだるゝ

第三百二十六回(大正六年二月) 題「残雪」 次選歌 大

きえのこる庭のしら雪くにがたをみるがごとしと子らはいふなり

(以上、『常磐会詠草・第五篇』)

【賀古桃次・作品集】

第七十回(明治四十五年六月十六日) 題「子」 入選歌 大・須

つかれたる親のこゝろをはげますは書よむ子らの声にぞありける

第七十二回(大正元年九月二十日) 題「夏汽車」 次選歌 須

くにぐにゝおよびをりつゝ親のまつ子をのせてゆくなつの汽車哉

第八十九回(大正三年一月) 題「水仙」 次選歌 大

やりみづにうすらひみえて鳥もこぬさびしき庭にすゑんの咲く

第九十八回(大正三年十月) 題「蜻蛉」 次選歌 大

ふたつみつはななほみゆる朝顔のまがきのたけにあきつとまれり

第四百四回(大正四年四月) 題「春鳥」 入選歌 佐・須

ほろくゝとはなちる軒の籠のうちにうたひつかれて小鳥もだをり

第一百十回（大正四年十月） 題「木犀花」 入選歌 鎌・大

花の香におどろかさされてもくせいのあるかたづぬる園のうちかな

第一百十一回（大正四年十一月） 題「大嘗祭」 入選歌 鎌・須

しろしめす御世やすかれとおほ神にいのりたまふもくに民のため

第一百十二回（大正四年十二月） 題「初冬」 次選歌 須

月見せしそのたかどのもゆふへくはやく戸をさす冬はきにけり

第一百十三回（大正五年一月） 題「初雪」 次選歌 須

めづらしと火をけはなれて窓あけておい人もみるけさのゆきかな

第一百十五回（大正五年三月） 題「紫」 次選歌 大

むらさきに富士の高嶺はほひつゝのきばくれゆくふぢえだの里

第一百二十二回（大正五年十月） 題「森」 次選歌 須

ふるさとはかのもりかげとゆびさして友にもつぐる汽車の窓かな

第一百二十三回（大正五年十一月） 題「象」 次選歌 須

細き目にしたしみみえてなかくに象はかなしきけものなりけり

第一百二十六回（大正六年二月） 題「和氣清麻呂」 次選歌 大

きばかみてせまる獣もおそれずたゞしきみちをふみしきみかな

【注記・その一】

ここに短歌作品を併載した賀古桃次は、賀古鶴所の弟である。簡単な系図を記すと、二人の父が、賀古公斎（一八一九〜一八八四）。頼山陽とも交際があったとされ、儒学を深く学び、漢詩を作る医者だった。元は大坂の人だったが、浜松藩の藩医となった。公斎の長男が、賀古鶴所。次男の篤男は、わずか十五歳で夭逝した。三男が、桃次で、愛知医専の教授を勤めた。桃次は、花柳界でも有名人だったという。『鷗外全集・第三十六巻』に収録されている鷗外の書簡にも、何回か賀古桃次の名前が見える。桃次は、明治二十六年に、東大医学部を卒業している。

なお、賀古公斎・賀古鶴所・賀古桃次の三人の医学者としての評価については、土屋重朗氏の著書『静岡県の歴史と医家伝』（戸田書店・昭和四十八年）、『鷗外をめぐる医師たち』（戸田書店・平成十年）に詳しい。

ところで、賀古鶴所の弟・賀古桃次の息子に、賀古明がいる。『琴歌譜新論』『万葉集新論』『日本の古代神話伝説文学』『日本の上代歌謡和歌文学』『日本文学新論』などの著書をもつ国文学者である。賀古一族の「文学的素養」が、この賀古明に結晶していると言っても過言ではない。賀古明は、佐佐木信綱主宰の『心の花』四十

二巻十号（昭和十三年十月）に、「常磐会と賀古鶴所」というエッセイを載せている。甥が、伯父を語っているわけである。

さらに言う。賀古桃次の娘・かつら（賀古明の姉）は、賀古鶴所の養女となった。その婿が、医学博士の額田晋。終生、医者に診察されることを嫌った鷗外は、臨終に際しても「医薬を斥クル書」を書くほどの医者嫌いだしたが、賀古の婿である額田のみは鷗外を看取ることが許された。額田には、「鷗外博士の臨終」（『新青年』大正十一年八月）がある。

【注記・その二】

この短歌作品の一覧からわかるように、すべての作品が、見事なまでの秩序で二十九文字で統一されている。ただし、これは賀古鶴所と賀古桃次だけではなく、『常磐会詠草』に掲載されているすべての作者の作品が、そうである。ということは、これらの短歌作品の表記は、作者自身の用いた表記ではなくて、活字本を出版する際の編集者の意図を反映したものである。だから、漢字か平仮名か、踊り字を用いているかいないかという区別は、作者のあずかりしらぬ領域であると考えられる。「表記論」は、『常磐会詠草』の場合には、ほとんど展開しえない。内容に直接、なおかつ深く切り込む文芸批評が、望まれるゆえんである。

ちなみに、鷗外記念本郷図書館に所蔵されている『常磐会詠草』の手書き原本では、「二行二十九字」という強制的な統一はまったくなされていない。毛筆による手書きの場合には、一首あたりの文字数を他と一致させなくとも、字配りによって各行の長さを統一することが簡単にできるからである。いくつか、比較しておこう。

（活字）ひめおきし手箱のなかの文がらをいづちねずみのとりちらしけむ

（手書）ヒメオキシ手箱ノナカノ文ガラライツラ鼠ノトリチラシケム

このように、手書き本では、ごく初期の入選歌は、「カタカナ書き」であった。第九回以降は、「ひらがな書き」となる。おそらく、賀古の原作では「鼠」だったのを、活字本で「ねずみ」と開いて、他の二十九字に合わせたのだろう。

なお、手書き本の「イツラ」が、活字本では「いづち」と印刷されている。賀古鶴所に関しては、この一例のみが、手書き本と活字本との間で「本文異同」の見られる貴重なものである。意味は変わらないが、「イツラ」が賀古の自作だったように思われる。活字本の誤植であろう。

むろん、表現の齟齬の起きた理由が、誤植でないこともある。三井財閥の大番頭だった益田孝は、何回か「常磐会」に出詠している。第二十三回の「白髪」では、見事に入選しており、その歌は、活字本では、

世のためになすこともなく老いし身はかゞみの霜に面なかりけり

である。ところが、当日配布資料の無記名一覧表では、それに該当する歌は、

世の為になすこともなく老ゆる身はかゞみの霜に面なかりけり

となっている。当日、その場に居合わせた鷗外は、鉛筆で欄外に「益田孝」と書き加え、作者名の披露があったことを明らかにしている。なおかつ、「老ゆる」の右側に「オイシ」と注記することで、選者の一人が「老ゆる身は」よりも「老いし身は」の方が表現的によりしいとコメントした事実も、明らかにしている。最終的な入選歌を書き記した活字本は、投稿歌そのものではなく、選者による推敲添削を経たものである可能性がある。「常磐会」のレベルを示すためにも、文法的に完璧を期したものと想像される。

さて、賀古鶴所の作品に話を戻す。活字本と手書き本の本文異同に話を戻す。

(活字) 朝づく日かすめる沖にしまひとつ湧きぬと見しはくぢらなりけり

(手書) アサツク日カスメル沖ニシマヒトツ湧キヌト見シハ鯨ナリケリ

(活字) まつが枝をかすめて飛びし白鳩のはねやふれけむふぢのはなちる

(手書) 松が枝をかすめて飛びし白鳩のはねやふれけむ藤の花ちる

ちなみに、この「まつが枝を」の歌が詠まれた時の「藤」という題への会当日の出詠歌は、五十六首。むろん、選者一人につき三十首までという「予選」を通過した結果だから、そもそもの投稿は、もっと多かっただろう。この五十六首の中から、最終的に「入選歌」に選ばれたのは、わずか十四首である。この数字から見ても、常磐会で入選するのは、容易なことではなかったのがわかる。

(活字) さを鹿のこゑもはるかにきこえてつきかげさびし山なかのうみ

(手書) さを鹿の声もはるかに聞えてつきかげさびし山中の海

(活字) 水かれし河原をひとはゆきかひてわたらぬはしにあきかぜぞふく

(手書) 水かれし河原を人はゆきかひて渡らぬ橋に秋風ぞふく

このように、活字本は、漢字をひらがなに開いて、字数を増加させている。作者の投稿した作品の(本来の)表記は、活字本より、もっと漢字が多かったものと思われる。

2・2 文京区立鷗外記念本郷図書館所蔵『常磐会詠草』による若干の補足

鷗外記念本郷図書館に所蔵される『常磐会詠草』全四冊のうち、三冊は、常磐会の席上で参加者に配られた「全作品リスト」(鷗外の書き込みメモ付き)である。この作品群に対して、選者たちがコメントし、点を入れ、「入選歌」と「次選歌」とを決定する。

鷗外は、自分の出席した日には、何らかのメモを書き残している。まったく書き込みのない場合には、欠席した鷗外に、後日、当日の配布資料が参考までに届けられたのだろう。

コピーもなかった時代だが、何と言っても陸軍ヒエラルキーの頂点に立つ山県有朋の肝煎りで始まった会である。陸軍で使われる「青焼き」ないし「青写真」などの機械を利用して、参加人数分の配付資料を短期間に作成することができたのではなかろうか。

さて、この中に、賀古鶴所の入選歌が当然何首か交じっているわけであるが、入選歌ともなれば、複数の選者のうちの誰かがコメントを述べる可能性が増大する。逆に言えば、「入選歌」でなければ、通常は選者のコメントはなされない(よほど未熟な表現があればコメントされるが、そのような歌が予選を通過する可能性は低い)。なおかつ、これが森鷗外の備忘録であるので、当日に鷗外本人が欠席せずに参加している必要がある。そのため、賀古鶴所の作品への選者たちのコメントが復元可能な箇所は、それほど多くはない。

舟人ののゝしる声にいでて見ればへさきに島ぞあらはれにける

鷗外は、この歌に関して、「サカ」とメモしているのので、佐佐木信綱と鎌田正夫が点を入れたことが判明する。予選者は井上通泰だったので、これで「三点」になり、入選作となったのだろう。

また、鷗外は、「佐よし」とも書き加えている。佐佐木信綱が、特にこの歌を「よし」と推奨した、というのである。

さを鹿の声もはるかに聞えきて月影さびし山中の海

鷗外は、この歌の「さびし」の右側に、「大サヒシイカ、」と注記している。選者の一人である大口鯛二が、賀古鶴所の「さびし」という形容詞の使用について「この言葉は、いかがなものか」と批判したというのである。

「さびし」と口では一言も言わずに客観的な描写に徹して、読者には「さぞかし、この時の作者はさびしかっただろうなあ」と思わせるのが余情というものであり、「さびし」と言ってしまうのは身も蓋もない、という大口の批判である。にも拘わらず、入選歌となっているのは、幸運だった。なお、同じ回で、落選した歌の中に、

たちこむる岸の杉村くらく見えて月ものすごし山中の海

がある。『常磐会詠草』の当日の配付資料に記載された歌は無記名であるので、本来ならば、鷗外が会の席上で披露された作者名を書き記すか、入選して活字本にまとめられる際に作者名が明示されるかしくは、誰の作品なのかはまったく見当もつかない。

ところが、この歌の場合には、先ほどの「さを鹿の」の歌と表現が酷似しているので、作者が賀古鶴所であることを、高い蓋然性で推定できるのである。「山中の海」と第五句が一致しているし、三句目を「て」で止める語法が一致している。明らかに、賀古の作品であろう。まことに珍しい例である。

では、入選歌と比較して、この「たちこむる」が落選したのは、なぜか。鷗外の当日のメモには、「たちこむる」の右側に、「佐イカ、」と傍記されている。佐佐木信綱が、「杉村」が「たちこむる」という言葉つづき（主語と述語の照応関係）に違和感を覚えて、「よくない」と発言したのだ。かくて、この歌が入選歌となることはなかった。

からすなく森のこずゑに見ゆるかな夕日かゞよふ城のしら壁

鷗外のメモで、欄外に「カコ」とある。作者名の披露があったのか、隣に座っている賀古が、鷗外に向かって「自分の作だ」と告げたかのどちらかだろう。選者のコメントは、記されていない。

川ながれ山そばだつとみるほどにつきさへふでにのぼりぬるかな

鷗外は、「佐妙、賀古」と書き記している。この歌が「賀古」の作品であること、佐佐木信綱が「妙也」と称賛したことが、判明する。「妙也」という賞賛の言葉は、『源氏物語湖月抄』などでしばしば用いられ、「巧みな表現だ」という褒め言葉である。決して、「奇妙奇天烈な言い回しだ」という批判なのではない。

佐佐木信綱は、「月がのぼる」と「筆にのぼる」の懸詞に感心して、この表現は洒落ていてよいと褒めてくれたのだ。

また、ある回には、「高湛」（鷗外本人）は、三つの題があったにも拘わらず一首のみの入選に留まったこと、妹の小金井喜美子があと一点足りずに入選できなかったことなどを、いかにも残念そうに書き残している。

3 賀古鶴所の略歴と、人となり

3・1 略歴

『常磐会詠草』における賀古鶴所の短歌作品を鑑賞するに際して必要と思われる最小限の略歴を、辿っておこう。一八五五（安政二）年一月二日に、浜松で生まれた。前述したように、父の賀古公斎は、浜松藩の藩医だった。維新後に、浜松藩主の井上氏が千葉県の市原に移封されたのに伴い、一八六九（明治二）年に、賀古鶴所も父と共に市原に移る。

東京大学医学部（入学当時の名称は第一大学区医学校）で、森鷗外と同期生。入学年度は賀古が二年早かったが、何らかの事情で賀古の進級が停滞し、二人は同級

生となったのである。一八六二（文久二）年生まれの鷗外より、七歳の年長だった（ただし、鷗外は実際より一切多く年齢を偽っていた）。

単に同級生だっただけでなく、寄宿舎で同室となり、堅い友情の絆で結ばれた。卒業後、陸軍軍医となる。山県有朋の知遇を得て、一八八八（明治二十一）年から一八八九（二十二）年にかけて、ベルリンに留学し、耳鼻咽喉科を学ぶ。日清戦争に従軍したが、明治二十五年に、陸軍在職のまま、神田小川町に賀古耳科院を開業した。当時は優秀な医者が不足していたので、官吏である軍医の私的な医院開業が認められていたのである。ちなみに、現役軍医の医院開業が正式に禁止されたのは、明治三十二年だといふ。

明治二十九年、賀古は広島に本部がある第五師団軍医部長に任命されたが、東京を離れるのを嫌い、陸軍を退職して、賀古耳科院の経営に専心した。ただし、日露戦争には、山県の意向で従軍した。軍医監が、賀古の官界における最高位である。

一九三一（昭和六）年一月一日に、脳溢血で死去。数えの七十七歳の喜寿を迎えた当日のことだった。満年齢では、七十六歳の誕生日の前日の没という計算になる。

「上総の軽井沢」と呼ばれた千葉県の日在に「鶴荘」という別荘を持ち、隣には鷗外の別荘「鷗荘」があった。なお、ここには講談社の野間清治郎、外務大臣の石井菊次郎邸、歌人の与謝野晶子邸などもあったという。鶴荘の表札を書いたのは中村不折で、彼は三鷹禅林寺にある森林太郎墓の文字を書いた人物でもある。

3・2 『鷗外をめぐる百枚の葉書』などから

ところで、賀古鶴所は、『常磐会詠草』以外では、どのような短歌（ないし和歌）を詠んでいるのだろうか。詳しくは第五章に譲るが、彼の人となりを見ておきたいので、何首か興味深い歌を紹介しておこう。

文京区教育委員会発行の『鷗外をめぐる百枚の葉書』（平成四年）に、賀古鶴所から鷗外に宛てた葉書の写真と翻刻が収録されている。明治三十七年十二月三十一日の日付がある。大晦日である。この当時、二人は日露戦争に従軍しており、賀古は遼東守備軍軍医部長、鷗外は第二軍軍医部長である。

文面は、歌一首。

をちこちの

とりでにみはた

ひらめきて

けふはさすがに

つゝのねもせず

とある。漢字や濁点をたくさん付けて、意味をわかりやすくすれば、

遠近の砦に御旗ひらめきて今日はさすがに砲の音もせず

となる。右下には、お正月にふさわしい姫小松の絵。左上には、一見すると初日の出に見えるが、よく見ると、男の似顔絵が描かれている。この葉書を受け取った鷗外は、日露戦争従軍中に、『うた日記』という詩歌集を詠んでいる。陣中の風雅は、賀古鶴所もまた忘れぬものだった。

なお、『鷗外をめぐる百枚の葉書』には、大正五年十一月十六日の日付のある賀古鶴所が鷗外宛に出した葉書も収録されている。これは、同年同月十九日に、賀古邸（神田小川町五十一）、通称「新々亭」で開催予定の「常磐会」には、山県有朋も出席するので、是非鷗外にも出席してほしい、と述べている。

また、鷗外の没した大正十一年の八月十三日に、賀古鶴所が加藤拓川に宛てた書簡には、次の歌が挿入されている。森鷗外記念館発行の『鷗外 その終焉』（平成八年）に、その写真が掲載されている。ちなみに、加藤拓川の妻（寿子）の母（永）と、賀古鶴所の夫人（けい、けい子、啓、啓子）は、姉妹関係にあった。

墓はらに独りのこりし心地せりかたらむ友ははや失せ行きて

この表記は、原文のままである。「かたらむ」は「語らむ」で、一緒になつかしい昔話を語り合おうと思っていた友は、という意味になる。正確には「かたらまほしき友」でなければならぬが、三十一音による制約と、親友を失った衝撃によって、「心あまりて詞足らず」という言葉つづきになってしまった。青春時代から変わらぬ友情で結ばれてきた親友・森鷗外（森林太郎）の死によって、片翼をもちがれてしまったような虚脱感を、率直平明に歌っている。

3・3 高橋英夫『友情の文学誌』より

をちこちの

とりでにみはた

この賀古鶴所と鷗外の交遊に着目した文芸評論の代表作に、高橋英夫『友情の文学誌』がある。賀古が、日露戦争従軍当時に、自作の歌を鷗外に見せて批評を請うた実例などを、豊富に挙げている。鷗外と賀古がどのような「歌の友」だったのか、わかりやすく示されている。

遼陽

大空に五輪うそぶく喇嘛塔の軒をめぐりて鳩ぞむれ飛ぶ

鷗外は、第二句の「うそぶく」を「そひゆる」と添削している。「簞ゆる」の意味だろう。

かざり火の烟のうへに月さえて旅ねしづけき満洲の夜や

鷗外は、「少シ露伴臭シ。但、佐々木信綱ナドモ、近頃コンナ風ニヤル事アリ」と感想を述べている。「簞火」は、軍営で警戒のために燃やしている松明のこと。そう言えば、賀古や鷗外と親しかった山県有朋が戊辰戦争の長岡攻略の際に詠んだとされる、彼の代表歌がある。

あだまもる砦のかがり影ふけて夏も身にしむ越の山風

ここにも「簞火」は詠まれているから、「戦陣」に「簞火」は付き物であり、「縁語」関係にあるのだろう。また、賀古の歌。

音に聞くウエニスの里もかくやあらんでみづににほふ窓のともし火

「でみづ」は「出水」で、溢れた水。ここは、運河なのかもしれない。「にほふ」は、嗅覚ではなく視覚的表現であり、「灯火が明るく反射している」という意味。鷗外は、表現を添削している。

明治四十五年、明治天皇が崩御。大葬までの間、柩を安置する殯殿ひんでんに、賀古は何候することになった。その感動を詠んだ歌が残っている。

おほまへのあかしをぐらく明けぬれどわが大君は起きいでまさず
おほまへをまかりいづとてぬかづけばものだにわかす涙こぼるる
大内をまかりいづれば朝ぎりのこむる御濠にはすの花咲く

従軍時に詠んだ「かがりび」「ともしび」と並んで、ここにも「あかし」が詠まれている。賀古は、もしかしたら「視覚」を重視する歌人だったのかもしれない。むしろ、「砲の音もせず」のような、聴覚的な表現もあり、そちらの方が『耳科新書』の著者としてはふさわしいと思うが、文学としては「聴覚」だけでなく、「視覚」にも重きを置いていると言えるのではないだろうか。

「はすの花咲く」も、実景をありのままに詠んだのだろうが、朝霧の中からかすかに見えてきた蓮の花を歌の末尾に据えることで、賀古の感情の比喩たらしめている。

「おほまへをまかりいづとてぬかづけばものだにわかす涙こぼるる」の歌は、鷗外に対する追悼歌「墓はらに独りのこりし心地せりかたらむ友ははや失せ行きて」と同じような組み立てであり、視覚も嗅覚も聴覚もなく、淡々とした説明調である。これが、賀古の「地」なのかもしれない。そのキャンパスの上に、さまざまなおモチーフや嗜好が重ねられて、「賀古鶴所」の作風が形成されてゆく。

その実態を、彼の「秀歌選」とも言える『常磐会詠草』入選歌（および次選歌）から観察してみよう。

4 賀古鶴所の『常磐会詠草』作品の分析

4・1 句切れの傾向

第二章で列挙したように、『常磐会詠草』から抜き出すことのできた賀古鶴所の歌は、合計で四十八首であった。

まず、一首全体の組み立てであるが、「自然な」文体と言うか、抵抗感のないただらかなリズムの歌が多いことに気づく。それで、句切れの箇所を確認してみよう。

ひめおきし手箱のなかの文がらをいづちねずみのとりちらしけむ

この歌のように、「句切れなし」の歌が目につく。数えてみると、「句切れなし」の歌が、何と三十一首にもものぼる。六割を上回る比率である。なお、

ふりたりといへばかはらのかけたるも価ある世をわれやなになり

という歌は、「句切れなし」と認定した。「価ある世を」の「を」は、「……なのに」という逆接の接続助詞であり、「……であるなあ」という感動の間投助詞なのであるまい。間投助詞と見なせば、四句切れとなる。

次に、句切れのある場合には、何句目で切れることが多いのだろうか。

たにぞこにひつじおひゆくわらはべの口笛さむし／あきのゆふぐれ

この歌のように、「四句切れ」の歌も、かなり存在する。これが、「句切れなし」の次に多く、四十八首のうち八首である。しかも、この八首のうち五首が、体言止めである。四句目の終わりで一度息をつぎ、満を持して第五句で歌の要となるべき体言を言い据える。最後に吐き出される七音が、一首全体を引き締める。手紙の「追伸」のような、表現効果がある。

その次には、

からすなく森のこずゑにみゆるかな／ゆふ日かゞよふ城のしらかべ

のように、「三句切れ」の歌が、五首ある。三句切れの特徴は、俳句的ということに尽きる。百人一首的というか、いささか間延びした和歌的な文体であり、近現代の短歌に馴れた目からは、いささか弛緩したような印象も与えないことはない。賀古の場合も、「かな」「けり」「なり」「む」などを用いて三句切れにしており、俳句の「切れ字」的な用法である。

以上見てきたように、「句切れなし」が三十一首、「四句切れ」が八首、「三句切れ」が五首。残りは、四首しかない。このうちの三首が、「二句切れ」である。

まがねふくけぶりに枯れぬ／しらくもの日ごとやどりしたにの老杉
われをまつ人ぞあるらし／はしの間にあふぎをならす音のきこゆる
きえのこる庭のしら雪／くにがたをみるがごとしと子らはいふなり

の三首である。賀古の歌としては、かなり珍しい文体である。この二句切れは、一種の「倒置法」のような表現効果をねらったものである。「鉄道蒸気の煙で枯れてしまった。日ごと、朝夕に白雲がそこから湧き、そこへ帰っていった谷底に生えていた樹齢何百年の大杉の木は」、「私の来るのを、待ち受けている人がいるようだ。ここからは見えないが、私の近づいてくる足音を察知して、向こうの部屋で扇を鳴らして誰か人がいることをそれとなく教えているのは」、などというように。

最後に残った一首は、一つの歌の中に二つの句切れを含むもので、平明な音韻を好む賀古としては例外的に、非常に凝った構造に仕上がっている。

たきものゝ香をとめこしか／川ちどり／おぼしま近くこゑのきこゆる

「千鳥の香炉」あたりからヒントを得たのだろうか。二句切れであると同時に、三句切れでもある。普通ならば、「川ちどり」を第一句（初句）にもってきて「句切れなし」で息永く（息太く）歌うのだろうし、四句切れにして「川ちどり鳴く」あるいは「鳴く川ちどり」という結びにするのが、賀古の本来の文体である。「川ちどり」が五音であるために、いつもの文体では一首全体がまとまらなかったため、「川ちどり」を第三句に据え、その後で二つも句切れがある異色の歌ができた。

なお、「初句切れ」の歌は、四十八首のうち、一首も見当たらない。新古今風と言いか、「七五調」の音韻は、賀古の取るところではなかった。あくまで、平淡な「五七調」の音韻を好んだことが、句切れに着目すれば見えてくる。

ちなみに、賀古桃次の作品で、『常磐会詠草』から抽出できた十三首は、すべて「句切れなし」の、おっとりした作風である。

4・2 「……すれば」という確定条件

賀古は、「……すれば、……」という確定条件の「ば」を愛用しているようで、この語法が作品に頻出する。確定条件とは、「已然形 + ば」である。正岡子規の、

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

の「ば」である。「未然形 + ば」が仮定条件を表し、「もしも、……するならば」

という意味であるのに対して、「已然形 + ば」は、「実際に……したところ」という既に確定した状況を表す。

試みに、賀古の歌の「ば」は、次のように用いられている。

舟人ののゝしるこゑにいでて見ればへさきに島ぞあらはれにける
 おき出でてあさ戸あくれば山百合のたかきかをりぞ内へいりくる
 たたかひのちまたとなりし跡とへば石のはしらぞひとりのこれる
 起き出でてあさ戸あくればつばくらめ我袖ぬひてよそにとび行く
 まゆを煮ていとる見ればいたづらにきぬの衣は着られざりけり
 曲玉もほればいづとふをかのかみ代のすぎのかみさびてたつ
 くれぬやとまどのとみれば窓の外の松の葉こごりみぞれふるなり
 原なかのやなぎのかげにたちよれば清水わくなり草むらのうちに
 みゝうとくなりぬる我もつゝのおときけばこゝろの勇みたつなり

四十八首のうちの九首が、この語法を使用している。かなりの頻度である。「曲玉もほればいづ」の「ば」は、正確には確定条件というよりも、「掘れば必ず出土する」という恒常条件を示しているのだろう。けれども、「未然形 + ば」（「ほらば」だと「もしも掘ったならば」の意味となる）の仮定条件とは一線を画しているので、あえて「確定条件」に含めておいた。

「おき（起き）出でてあさ戸あくれば」（朝、目を覚まして戸を開けたのだが、そうすると）という同じ書き出しの歌が二首ある。一首は、「朝戸（雨戸だろう）を開けた瞬間に、庭で咲いていた山百合の強い香りが家の中に飛び込んできた」という嗅覚に基づく驚きを歌っている。もう一首は、雨戸を開けた瞬間に、軒下から燕が突然飛び出して、作者の袖をくぐりぬけるように接触して遠くへ飛び去ったという驚きを詠んでいる。睡眠状態の延長である「静」の精神状態が、一気に「動」へと変貌する瞬間の驚きを、この二首はテーマとしている。

また、「見れば」ないし「みれば」の歌が三首、「きけば」の歌が一首ある。このことからわかるように、「視覚」や「聴覚」に基づいて自分が新しく発見した世界に関する新鮮な驚きが、眼目となっていることが多い。

一見すると素人風の（いささか垢抜けしない）「ば」の多用であるが、よく味読してみれば、日常生活の中で賀古の「歌ごころ」が切り取った非日常の感覚が表現されていることに気づく。

4・3 三句目の「て」止め

古典和歌の髓脳（手引き書）では、三句目を「……して」というような、接続助詞の「て」で結ぶ技法を、避けるようにと指導されている。間延びするというか、詩的緊張感が消滅してしまう危険性があるからだろう。むろん、

春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるる横雲の空 藤原定家

のような、三句目の「て止め」の名歌も多いのだが、プロの「て止め」と、素人の「て止め」とでは、格段の違いがある。賀古の場合は、どうだろうか。

かた岸のぬるでもみぢちりそめておく霜しろしかはなかのいし
 さを鹿のこゑもはるかきこえきてつきかげさびし山なかのうみ
 水かれし河原をひとはゆきかひてわたらぬはしにあきかぜぞふく
 朝ごとにわれをおこし馬も老いてゆか蹴るおとぞ稀になりぬる
 ふみたてし鳥ははるかにとびさりて犬もぬしをばうとみがほなり

四十八首のうちの五首という比率である。

「かた岸の」と「さを鹿の」の歌は、「四句切れ」を採用することで、平板な「たごご歌」に随してしまふのを防いでいる。

「水かれし」と「朝ごとに」の歌は、「ぞ」という係助詞を第四句以降に使って「係り結び」にすることで、単調な印象になる危険性を防止している。

最後の「ふみたてし」の歌は、内容のユーモラスさがおかしみを醸しだしており、平板という印象を読者に与えない。「せっかく獵犬が草藪から追い立ててくれた鳥を、狩人は空しく打ち損じてしまった。鳥は、はるかかなた安全地帯に逃げ去ることに成功した。主人に絶対の忠誠心を誇る獵犬も、心なしか主人を馬鹿にしているように見える」。俳諧歌（誹諧歌）の精神である。ユーモアが、退屈さを吹き飛ばしている。

4・4 係り結び

「ぞ・なむ・や・か・こそ」などの係助詞を用いる係り結びの歌も、かなり自立つ。

まつが枝をかすめて飛びし白鳩のはねやふれけむふぢのはなちる (疑問) (強調)
 舟人ののゝしるこゑにいでて見ればへさきに島ぞあらはれにける (強調)
 水かれし河原をひとはゆきかひてわたらぬはしにあきかぜぞふく (強調)
 おき出でてあさ戸あくれば山百合のたかきかをりぞ内にいりくる (強調)
 たゝかひのちまたとなりし跡とへば石のはしらぞひとりのこれる (強調)
 畑に出でて大根引く子やいかならむ綿繰る手さへひゆるあしたに (疑問)
 朝ごとにわれをおこし馬も老いてゆか蹴るおとぞ稀になりぬる (強調)
 ふりたりといへばかはらのかけたるも価ある世をわれやなになり (疑問)
 おいびとも老をわすれてとりすむかるたぞ春のあそびなりける (強調)
 ゆふ立のあめをつきつ夏の野をはせゆく汽車のうちぞすゞしき (強調)
 いちなかはうつ人なしと雁がねのなきかはしてやひきくとぶらむ (疑問)
 つなぎ縄たゝれて海にすゝみいでし船のへさきにしらなみぞたつ (強調)
 われをまつ人ぞあるらしはしの間にあふぎをならす音のきこゆる (強調)

四十八首のうちの十三首だから、かなりの頻度である。このうち、疑問の「や」を用いた歌が、四首ある。

なお、「ふりたりと……」の歌は、一見すると係り結びが変に見える。「や」は、連体形で結ぶのが原則だから、第五句は「われやなになる」でないと同音であるはずだ。ところが、賀古鶴所は「われやなになり」と歌っている。この歌を予選で選んだのは井上通泰であるし、本選でも須川信行が点を入れている。居並ぶうるさがるたの選者たちの誰一人、この係り結びの不自然さを批判していない。
 なぜかと言えば、「われやなになり」という表現が、既にイデオムとして古典和歌の世界で確立していたからである。

うれしきを忘るる人もあるものをつらきを恋ふるわれやなになり

(後拾遺和歌集・六三八・源成政)

須磨の海人の浦漕ぐ舟のあともなく見ぬ人恋ふるわれやなになり

(後拾遺和歌集・六五二・源高明)

梅もみな春近しとて咲くものを待つときもなきわれやなになり

あひ思はぬ人の心を淡雪の解けでしのぶるわれやなになり

(貫之集・八七一)

最も権威のある勅撰和歌集にも、私家集にも、そして紙数の関係で省略したが『古今和歌六帖』などの私撰集にも、「われやなになり」という係り結びの破格表現は頻出している。だから、賀古の「われやなになり」という言い回しは、文法的な無知の結果ではなくて、古典的素養のなせるわざだった可能性もある。

「ただ古いと言うだけの理由で骨董品としての価値のある瓦もあるというのに、長く生きてきて智慧を蓄えたはずの自分が世間でまったく無価値だと思われている。一体全体、この私という人間は、どういう存在なのだろうか」。賀古の激しい怒りを感じさせる歌であり、それは「われやなになり」という由緒正しい破格表現のもたらした効果だったのである。

さらには、「われをまつ人ぞあるらし……」の歌についても、補足しておきたい。推定の助動詞「らし」は、通常は終止形のみが用いられる。連体形「らし」「らしき」と已然形「らし」は、ごく稀に係り結びにのみ用いられる。だから、賀古には、「われをまつ人ぞあるらしき」とも歌えたのだが、字余りになってしまい、歌のリズムがそこなわれてしまう。何と言っても、「ぞ……らし」という係り結びの前例が、和歌の聖典『古今和歌集』にもある。

降る雪はかつぞ消ぬらしあしひきの山のたぎつせ音まさるなり

(古今和歌集・三一九・詠人知らず)

「人ぞあるらし」は、正統的な日本語の係り結びである。賀古の言語感覚は、『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』などの歌風であり、要するに「桂園風」ということになるのである。

4・5 色彩感覚

賀古の歌から、色彩感覚の感じられるものを見てゆこう。

まつが枝をかすめて飛びし白鳩のはねやふれけむふぢのはなちる

表面的には「白」のみが歌われている。けれども、白鳩の「白」を際立たせたのは、「まつが枝」の「緑」であり、また「ふぢのはな」の「紫」であった。すなわち、この歌は、緑と紫の中を一瞬かすめた「白」という色彩の残像を詠んだものだったのである。

かた岸のぬるでもみぢちりそめておく霜しりしかはなかのいし

この歌も、「しろし」という「白」の感覚を際立たせているのは、「ぬるでもみぢ」の「紅」である。もしかしたら、賀古の原案では「ぬるでの紅葉」とあって、「紅」を視覚としてもより明瞭に訴えていた可能性もある。一行を二十九字で統一させられたときに、「もみぢ」と平仮名に開かれてしまったのかもしれない。

からすなく森のこず多にみゆるかなゆふ日かよふ城のしらかべ

ここでも、表面的には「白」が浮き立っている。ただし、その白は遠景であり、賀古の視点の近景には、「からすなく森のこず多」が広がっている。「からす」は黒だし、「森のこず多」は暗緑色であろう。

まがねふくけぶりに枯れぬしらくもの日ごとやどりしたにの老杉

この近代文明批判の歌は、あるべき色彩感覚と、厭わしい色彩感覚との双方を詠んでおり、興味深い。本来は、鮮やかな「緑色」の杉が、毎朝毎晩「白雲」に覆われてあるべきなのに、現在は「真つ黒」な煙に覆われてしまった、というのだ。「白」が生命の色、「黒」が死の色である。

うちわたす青田のはてのとは山のうへにそびゆるくものみねかな

表面的には「青田」の「青」のみが突出しているが、その清々しさを引き立てているのは、遠山の峰の上に聳えている「白雲」の峰である。「山の峰」と「雲の峰」の懸詞であり、凝った趣向である。やはり、「白」である。複数の色彩の中の「白」

ということだろう。

なお、「うちわたす」という言葉は、『古今和歌集』の旋頭歌(五七七五七七)の、

うちわたすをちかた人にもまうすわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも

でも用いられている古語(歌語)であり、「ずっと遠くを見渡す、見晴るかす」という意味である。『古今和歌集』の旋頭歌でも、遠くの「白」が浮き立っていたが、賀古の歌でも、遠くの「白雲」が最も鮮烈な色彩感覚となっている。

きえのこる庭のしら雪くにがたをみるがごとしと子らはいふなり

賀古にしては珍しい「二句切れ」の歌である。それほど、「しら雪」が賀古に与えた「白」の印象が鮮烈だったのだろう。賀古が、その「白」のイメージに浸っていると、子どもたちは別の感想を述べた。消え残った雪の形が、「くにがた」に似ている、というのだ。「くにがた」は、おそらく「国形」であって、「国方」ではあるまい。子どもたちは、雪を見ながら、「あの盛り上がっているところは、富士山のようにだ」とか、「あそこに離れている雪の塊が、佐渡島」などというような見立てを行い、嬉々として楽しんでいたのである。色彩よりも、形状(輪郭)を重視しているのだろう。

同じ雪を見ても、大人と子どもで違う印象を持つというのが、この歌の面白さかもしれない。

4・6 視覚・聴覚・嗅覚

医者として「耳科」の専門家であった賀古鶴所は、今まで見てきたように、繊細な色彩感覚の持ち主でもあった。また、「耳科」は、「耳鼻咽喉科」とも言うように、「鼻」(や喉)とも密接な関わりがある。「嗅覚」あるいは「喉の渴きの感覚」などが、どのように彼の歌に反映しているのだろうか。ちなみに、常磐会で賀古の歌の「予選」に当たっていた井上通泰は、有名な眼科医であった。

たにぞこにひつじおひゆくわらはべの口笛さむしあきのゆふぐれ

この歌は、「谷」という題で詠まれている。けれども、「たにぞこ」から「ひつじ」へと連想を広げていった契機は、何だったのだろうか。もしかしたら、この歌の詠まれた明治四十年三月が「末年」（丁未）なので、そこからの連想が賀古に作用した可能性も皆無ではなからう。

さて、この歌では、「口笛」を聞くという聴覚に基づく認知作用が出发点である。それが、聞いていた主体（賀古）に、「さむし」という皮膚感覚を抱かせた。秋の夕暮に、風が冷たく吹いてきたので、「さむく」感じられるという意味と、羊飼いの少年の口笛を聞いて、心が「さむく」感じられたという意味とが、重層している。

朝づく日かすめる沖にしまひとつ湧きぬと見しはくぢらなりけり

「見しは」とあるように、視覚が中心の歌である。第五句の「くぢらなりけり」の「なりけり」の語法に注目したい。古文の「なりけり」は、今まで不注意で気づかなかつたが、よくよく見てみると、本当は「……だったのであるなあ」「……であったことよ」というニュアンスである。今、初めて気づいた、という驚愕の念を讀者に訴える機能を發揮する。「発見・気づき」の用法と呼ばれる。『源氏物語』や王朝和歌で愛用された語法である。

ずっと「島」だと思っていたものの実態が動物の「鯨」だったという驚きを、素直に詠んでいる。日清・日露の両戦争に従軍した賀古は、何度も船で大陸へわたった経験があった。その際に、鯨を見たことがあったのではなからうか、という想像を讀者にさせるだけのリアリティが感じられる。

さを鹿のこゑもはるかにきこえきてつきかげさびし山なかのうみ

耳に聞こえてきた、かすかな鹿の鳴き声。その聴覚から歌い始められた、この歌は、山上の湖面を照らす「つきかげ」（月光）の白さをもって結ばれる。どこにも、月光の色彩について言及していないが、月の白さが、作者に「さびし」という魂の感覚を覚えさせたのである。

いちなかはうつ人なしと雁がねのなきかはしてやひきくとぶらむ

「ひきく」は、「ひくく」（低く）の意味。「うつ」は「鉄砲で撃つ」ことで、雁た

ちも猟銃で撃たれる心配がまったくないと安心して、市街地では低空飛行しているのだらう、という意味になる。「いちなか」と言えば、

いちなかはものにほひや夏の月 凡兆『猿蓑』

という句を連想させずにはおかない。凡兆は、「いちなか」の「にほひ」（嗅覚）を詠んだが、賀古は「いちなか」に響くカリカリという雁の鳴き声（聴覚）を歌っている。しかも、雁の鳴き声だけでなく、実際には聞こえない猟銃の発射音まで背景に沈め込ませている。

ちなみに、この歌は、雁（動物）が人間を馬鹿にしている、という内容である。本来は、高等動物であるはずの人間が、他の動物に低く見られているという類想歌は、賀古には多い。

はしためをあなづりかほに小鼠のかまどのかげに見えがくれする
ふみたてし鳥ははるかにとびさりて犬もぬしをばうとみがほなり

「ふみたてし」の歌も猟を詠んでいるので、もしかしたら賀古鶴所には猟銃への興味と関心があったのかもしれない。「あなづり顔」と「うとみ顔」は、類義語である。

聴覚・嗅覚・視覚に、話題を戻す。

いろいろのはなをさかせて夏草のわれをまつらむ磯のなりどころ

日在の別荘「鶴荘」のことを詠んだのであろうか。磯から波の音が聞こえる別荘の庭には、いろいろの夏草が私が訪れるのを待っていることだらう。

「磯のなりどころ」とあるので、何よりも聴覚が主眼となっている。与謝野晶子の、

海こひし潮の遠鳴り数へては乙女となりし父母の家

と少し似ている。また、「いろいろの」は、意味的には「種々の」で、いろいろな種類の、ということだが、赤や黄色や白などの、さまざまの色彩の花々という含みも

あるだろう。つまり、「視覚」と「聴覚」とが融合している。

なおかつ、この歌を作ったときの賀古にとっては、鶴荘の周辺に漂う「潮の香」が一瞬鼻先をかすめたであろうから、「嗅覚」の要素も加味されていないこともない。

冬枯のいてふの老木さむげにもぬけいでみゆるうぶすなのもり

賀古の眼に映った冬の森を詠んでおり、視覚によって成立した歌である。産土の森から、一本の背の高い枯れ木が頭を抜け出している。葉を落とし果てた銀杏の木である。他の木々がすべて落葉樹かどうかはわからないが、何本かは常緑樹も交じっていることだろう。緑色の森から、裸木が顔を出しているのを見て、「いかにも寒そうだ」と、賀古は擬人化して表現している。裸木が、まるで針のように、冬空に突き刺さっている、というイメージである。

なお、賀古は第四句を「ぬけいでみゆる」と字余りで歌っている。もし、「ぬけいでみゆ」とすれば、四句切れになる。賀古には、かなりの頻度で「四句切れ」の作風が見えるが、やはり「句切れなし」が最も多かった。字余りになってまで、「ぬけいでみゆる」としたところに、賀古の文体の本質が「句切れなし」の大らかな作風だったことの証が見受けられる。

たにあひのみづはみやまのしづけさをあとに残して流れいづらむ

「深山の静けさ」と「谷間の水の轟音」とが、対比されている。すなわち、聴覚に基づく構成である。二種類の聴覚を重層している点に、賀古の耳のよさを感じる。ただし、「流れいづらむ」のままだと、「今頃は、さぞかし流れ出していることだろう」の意味となる（現在推量）。ここは、あるいは「流れいでけむ」の方がよいようにも思われる。「らむ」の着地が、今ひとつ決まっていけないのではなからうか。

みづこふとしづのふせやをとふ道にかをりきにけりもくせいの花

「喉の渴き」という感覚と、「金木犀の香り」という嗅覚が融合している。「かをりきにけり」の「けり」は、「何か、いい匂いがすると思っていいたら、なるほど、金木犀の匂いであることに気づいたよ」という、発見のニュアンスだろう。「何とまあ、匂ってきたことだなあ」という「詠嘆」なのでは、あるまい。

一歩一歩、作中人物（賀古の分身）が、「しづのふせや」（農家）に近づくにつれ、金木犀の香りが濃厚になってゆくというプロセスが、巧みに表現されている。

4・7 戦の歌と、生活者の歌

これまで鑑賞してこなかった賀古の歌のいくつかを読みつつ、彼の人間性を垣間見てみたい。

たゝかひのちまたとなりし跡とへば石のはしらぞひとりのこれる

日露戦争に従軍した経験を、賀古は思い出しているのだろう。「石のはしら」を「ひとつ」ではなくて「ひとり」と表現したのは、いわゆる擬人法である。

朝ごとにわれをおこしゝ馬も老いてゆか蹴るおとぞ稀になりける

賀古鶴所の親友の鷗外には、自宅玄関から馬に乗って出勤する有名な写真がある。通常は、市電で市ヶ谷の陸軍省に通っていたのだろうが、軍人であるから馬がいて、馬丁がいて、厩があった。賀古も、同じような環境で、馬と暮らしていたのであるうか。「馬」は、賀古の軍医としての人生と密接に結びついている動物と言えよう。

かへりきてゆあみしつゝも思ひけりいくさのにはの水のともしき

戦場での水の欠乏と、日本に戻ってからの贅沢な入浴との対比を歌っている。戦場体験が、活きている。ちなみに、鷗外が日露戦争から凱旋帰国した時の写真が残っているが、いかにも疲弊しきっている。戦地での日々は、入浴もままならぬ極限の連続だったのだろう。

つなぎ綱たゝれて海にすゝみいでし船のへさきにしらなみぞたつ

普通の船ではなく、軍艦であり、戦地へ向かう（あるいは凱旋帰国する）ための出港の情景なのだろう。その時の「へさき」の「しらなみ」は、幸先の良い吉兆なのであろうか。

みづうとくなりぬるわれもつゝのおときけばこゝろの勇みたつなり

自分も今ではすっかり耳の遠い好々爺になりはててしまったが、昔、勇ましく戦ったことは体が覚えている、というのである。『常磐会詠草』には、軍医として生きた賀古鶴所の人生が、色濃く塗り込められている。また、自然を歌った「叙景歌」にも、どことなく彼と鷗外が従軍していた満洲の荒涼とした光景が影を落としていくようにも思われる。

かしましくいひ争はでさかひには八重がきゆひてあるべかりけり

この歌では、一転して、生活者の視点で歌われている。隣家との敷地争いは、賀古家に実際に起きていたことなのだろうか。それとも、単なる想像なのだろうか。わずかの土地の所有権をめぐる隣家同士が争う醜さを批判し、境界線には奥ゆかしい八重垣でも結んで、仲良く風流に暮らすのがよい、と諭している。

冬さればすゝきかれふしひろの原おもはぬかたにうみも見えけり

親友・鷗外の千駄木の家は、「観潮楼」と称した。かつては、この本郷台地から品川の海が見えたからである。だから、この賀古の歌も、どこか武蔵野の一角から、突然に海が見えたと解釈してもよからう。また、彼が忘れがたく記憶している満洲かどこかの広大な平原の冬のエピソードだと解釈しても、間違いではなからう。

4・8 賀古桃次の歌をめぐる

賀古桃次は、賀古鶴所の弟である。その短歌作品は、『常磐会詠草』から、合計十三首拾うことができる。うち四首が、入選歌である。彼の作品を何首か、鑑賞してゆこう。

くにぐに、およびをりつゝ親のまつ子をのせてゆくなつの汽車哉

いささか内容が詰まりすぎている。「日本全国、例えば越後の国、肥前の国などで、

東京で勉学している我が子が夏に帰省してくるを、親御さんたちは指折り数えて待っている。その子どもたちを乗せて、夏の汽車は東京からそれぞれの国許へ走ってゆく。「くにぐに、およびをりつゝまつ親の」でないで、ちよつと意味が取りにくい。桃次には、

ふるさとはかのもりかけとゆびさして友にもつぐる汽車の窓かな

という歌もあるので、汽車が好きだったのかもしれない。

なお、この「汽車の窓かな」という歌のように、「かな」で歌い納めることが桃次には多く、十三首のうちの五首という割合である。

やりみづにうすらひみえて鳥もこぬさびしき庭にすゐせんの咲く
ふたつみつはななほみゆる朝顔のまがきのたけにあきつとまれり

水仙の歌は、冬。朝顔の歌は、初秋。淡々とした叙景歌であるが、水仙には鳥が、朝顔には蜻蛉というふうには、植物と動物（昆虫）が巧みに取り合わされている。

ほろくとはなちる軒の籠のうちにうたひつかれて小鳥もだをり

歌い疲れた鳥が、籠の中で沈黙している。その籠には、ほろほると散った花びらが吹き込んでいる、という情景。「うたひつかれて」の部分で、どことなく歌謡調である。桃次は、花柳界でも名を馳せたというから、その「通人」ないし「粋人」の要素が、この歌謡調の表現に反映しているのかもしれない。遊びを感じさせる歌であり、作者像である。

月見せしそのたかどのもゆふべくはやく戸をさす冬はきにけり

「たかどの」は、二階建ての住居ならばどこでもよいのだろうが、やはり雰囲気としては「楼閣」で、妓楼の方がぴったりくる。ちよつと前までは、酒の席で月見と洒落込んで、風流に窓を開け放っておいたのに、今では「寒い寒い」と言っさつさと窓を閉めきりする冬が来てしまったことだ。……

歌の背後から、チントンシャンが聞こえてきそうな歌である。

なお、この歌の「冬はきにけり」のように、歌末を「けり」ないし「ける」で終わらせている歌が、十三首のうちの三首を占めている。

細き目にしたしみみえてなかくに象はかなしきけものなりけり

「けものなりけり」の「なりけり」は、発見・気づきの語法である。よくよく見てみれば、象は恐ろしい動物ではなくて、愛敬があり、同情すべき動物なのであったなあ。

「象」という題をもらったので、あわてて動物園に走り、象をしげしげと観察している、とでもいった内容である。一読ほほえましい歌であり、選者も思わず微笑しながら予選に当たったのではなからうか。

総じて、賀古桃次の歌は、アマチュアの域を脱していないが、「人の良き」あるいは「洒脱な人柄」を感じさせる。その人柄は、ある意味で、兄の賀古鶴所とも通じていよう。

5 森鷗外の書簡にみる賀古鶴所との交流

5・1 年長の友・賀古鶴所

森鷗外と賀古鶴所の友情の本質は、どこにあるのだろうか。『鷗外全集・第三十六巻』には、鷗外が賀古に宛てた多数の手紙が収録されている。あくまでも『鷗外全集』なので、原則として賀古からの文面は収録されず、「往復書簡集」のスタイルになっっていないのは、はなはだ惜しまれる。けれども、鷗外の文面を読んでいると、二人の交情の実態がつぶさに見えてくる。

鷗外が賀古に宛てた書簡を通読し了えて、わたしは『伊勢物語』三十八段の世界を想起した。在原業平は、自分よりはるか年長の紀有常（きのありつね）と親しく交わっていた。ある時、彼の家に遊びに行くと、彼は外出して不在だった。業平は、

君により思ひならひぬ世の中の人
はこれをや恋といふらむ

と詠んで、会えないのを残念がった。やがて戻ってきた有常の返事は、

ならばねば世の人ごと
に何をかも恋とはいふと問ひし我しも

だった。年下の男（業平）が、年上の友（紀有常）に向かって、「あなたと会えないで苦しい今の気持ちを、世間の人はずっと『恋』と呼んでいるのでしょうか。わたしは、あなたから、『恋』がどういうものか、初めて教えてもらいました」と、戯れている。

鷗外が『伊勢物語』を詳しく読んで血肉化していることは、拙著『漱石と鷗外の遠景』（ブリュッケ、平成十一年）で証明済みである。また、鷗外の有名な遺書（これを替わりに筆記したのが賀古鶴所であることは既に述べた通り）で、「生死ノ別ル、瞬間、アヲナル外形的取扱ヲ辞ス」と述べた鷗外の臨終時の絶望感は、『伊勢物語』百二十四段の、

思ふこと言はでぞただにやみぬべき我とひとしき人しなれば

という業平の臨終の思いと、通じるものがある。

これだけ深く『伊勢物語』と馴染んだ鷗外は、「賀古」紀有常、「鷗外」在原業平」という見立てを行わなかっただろうか。

明治三十七年五月二十日、日露戦争に従軍している鷗外は、これまた従軍している賀古鶴所に手紙を出した。『鷗外全集』に付された書簡番号では、三三八。

拝啓 総軍医部が出来るにつき、小生が往く筈なりしに、ある人故障をいひし由きて、左のうたをよみ候。

世の中の恋てふことやわすれけん待たねば来ぬとなげかずなりぬ
又、右は、頗る譎言らしきこと言ひしものあるためとききて、よみ候。

おほからん我罪せむることの葉をさかばたふとき教とおもはん
しかはあれどいかなる人か罪なくて初の石をわれになげうつ

引用に際しては、句読点と濁点は付したが、送り仮名などの表記は『鷗外全集』のままとする。ただし、ルビは、私意に施したものがあつた。以下、同様である。総

軍医部が新しく出来ることになって、鷗外が呼ばれる予定だったのに、ある人が「故障」を言い立てて、それを阻止した。鷗外は、それが「讒言」であると、賀古に向かつて苦情を漏らしている。

だから、「故障」とは、誰かが鷗外本人に関する「批判・悪口」を指摘して、鷗外を呼び寄せることに異議を申し立てたことを意味している。なおかつ、鷗外は、讒言した人物がほかならぬ「旧友」であることを苦々しく思っているのではなからうか。鷗外の書簡の中に含まれる最初の歌を、もう一度掲げておく。

世の中の恋てふことやわすれけん待たねば来ぬとなげかずなりぬ

先ほど引用したばかりの『伊勢物語』三十八段の歌には、どうあったか。

君により思ひならひぬ世の中の人はいこれをや恋といふらむ

業平は、不在の有常の帰宅を、ひたすら待ちつづけた。まさに、男が愛する女と一瞬たりとも離れていたくないと恋いがれるように。あるいは、女が男の訪問を夕方になると待ちつづけるように。真の友情で結ばれた男たちは、現在は別の場所に離れている親友の来訪や帰宅を、早く早くと待ちつづけるものである。

鷗外は「世の中の恋てふこと」と歌っている。この言葉つづきは、明らかに『伊勢物語』三十八段の「世の中の人はいこれをや恋といふらむ」を意識した本歌取りである。すなわち、鷗外は、「業平と有常の友情」を踏まえて、歌っている。

ところが、鷗外を讒言して斥けたのは、ほかならぬ鷗外が親しく交際していた男だったのである。鷗外は、賀古鶴所に何を訴えたかったのか。

「私を讒言したのは、ほかならぬ旧友ですよ。昔の業平と有常のような本当の親友ならば、離れた所で勤務している私を総軍医部に呼び戻して一緒に会おう、鷗外よ、こちらに來い、そんなに待たせつづけないで、早く来てほしいと思うはずでしょう。その彼が私を斥けたというのは、昔、一日でも離れていたら会いたくてたまらなかった『恋』を、彼がすっかり忘却したからかもしれないですね。そうではなく、いまだに私と深い『恋』の感情で結ばれた賀古鶴所君なら、今の私の苦悩をわかってもらえるでしょうし、『恋』を忘れ果てた昔の友への私の怒りの大きさもまた、わかってもらえるでしょう」。

その「昔の友」は、鷗外攻撃の「初の石」を投げた。すなわち口火を切ったので

ある。この書簡の行間から浮かび上がってくるのは、「在原業平と紀有常」と同じ固い友情で結ばれた鷗外と賀古の姿である。年齢の違いを乗り越え、男同士が「恋心」にも似た友情を育むことに成功している。

「故障」を言い立てて鷗外を「讒言」した軽薄な友とは違い、賀古鶴所は終生変わらぬ友情の誠を鷗外に捧げる。それが、「余ガ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友ハ賀古鶴所君ナリ」という鷗外の「遺言」の冒頭部分へとつながってゆく。

5・2 賀古の「白魚のうた」

鷗外の書簡番号三五七（明治三十七年四月二十一日）は、妹の小金井喜美子に宛てたものである。この中に、賀古の歌が論評されている。『鷗外全集』の「後記」によれば、以下のようなやりとりがあったという。

まず、日本の井上通泰から、陣中見舞いとして、日露戦争に従軍している賀古鶴所に白魚が贈られてきた。賀古が、井上に感謝して作った歌。

隅田川桜のもとに舟うけてかすみの中にくみし白魚か

このことを、鷗外が聞いて作った歌。

春川の日影にはえてさらく〜とあみをすべりし白魚やこれ

鷗外がこれらの事実を、妹の小金井喜美子に手紙で知らせたところ、喜美子が詠んだ歌。

ゆくりなく汚れし耳を洗ひけりかげもすみ田の花のした水

賀古の歌の第五句に、もしルビをふれば「しらうを」ではなくて、「しらを」なのだろう。そうでなければ、字余りとなってしまふ。隅田川をさかのぼってくる白魚を、満開の桜の花のもとで獲ったものなのだろう、と賀古は歌っている。

空にたなびく「霞」、そして「霞」と見紛うばかりの墨堤の桜並木。さらには、霞が深くたちこめているようすを、古来「霞の網」と喩えることから、それを利用し

て「漁師の網」を導いてくる。なかなか技巧的で、知的な詠みぶりである。賀古としては、自信作だったことだろう。

しかし、鷗外は書簡三五七の中で、

賀古白魚のうた、「魚を汲む」といふこと、いかゞ。俗には、「すくふ」といひて、「すくふ」は「汲む」と同じく、水にも云ふ。されど、魚は「とる」といふがよろしく、

すみだ川桜の下に舟うけて霞のうちにとりし白魚か
とせんなど、申居候。井上は、何といふらん。

鷗外は、賀古の歌を添削しているわけである。「魚を汲む」という言葉つづきを斥けて、「魚を捕る」と歌うべきだと言っている。名詞と動詞の対応に関して、鷗外は厳しく、賀古はいささか鷹揚だったということだろう。

ちなみに、『鷗外全集』の補注には、広島で賀古が詠んだ、戦地に向かう鷗外への別離の歌と、それに対する鷗外の返歌とを書き記している。

(賀古) 船出する宇品の島も霞みけり遙かに君を送るにやあらん
(鷗外) さらにばく宇品島山なれもまた相見ん時はいかにあるべき

賀古の歌は、「霞」と「遙かに」とが、「縁語」関係に当たるのであろう。「御覧よ。霞が遙か向こうまで棚引いているね。それは、遙か遠くまで船出する君を送る惜別の涙で、空がかすんでいるからかもしれないね」。瀬戸内の「宇品の島」を擬人化して、「島」が涙で目を霞ませている、と詠んでいる。大きな作風である。

鷗外はそれを受けて、やはり擬人化した「宇品島山」と、凱旋する自分とが再会するであろう日に、思いを馳せている。

「宇品の島」や「宇品島山」は、ここでは賀古鶴所その人の比喩でもある。

5・3 「雨」の歌の唱和

書簡番号四五八(明治三十八年四月十三日)は、第二軍軍医部長の鷗外が、遼東軍軍医部長の賀古鶴所に宛てた手紙である。

四月十一日、清太祖の陵にまうづる道すがら、始て、にひ草のもゆるを見つ。その夕、三賢堂の隣なるかりいほにかへりて見れば、大久保栄ぬしは東京より、賀古鶴所ぬしは大連より、いづれも雨のうたをよみて、おこせつ。

栄 草も木もうるほひにけり土くれをくづさぬ雨の深き恵みに
鶴所 春雨はしとどにふれど木の下の小草も萌えず鳥も来なかず

そを見て、雨のことを思ひつゞけてねし夢に、雨のおとをきゝてよめる。
野にいでゝけふしも見つる下もえの草の上にあや夜の雨ふる

目さめて、まどの外を見れば、星の光あきらか也。わすれぬひまにとて、火と
もしてかいつく。 源高湛

「源高湛」は、鷗外のこと。東京からは、「雨が降ってきて、春の草木が既に芽吹いている」という歌が送られてきた。ところが、大連の賀古鶴所からは、「春雨が降っているのに、この土地ではまだ春草が芽吹かない」という歌が送られてきた。同時に届いた歌なので、日本と満州の春の到来の違いがはっきりとわかって、鷗外は興味深く思ったのだろう。そして、今日の昼間、自分が初めて萌えだした草を目撃した事実を想起し、三者三様の「雨」と「草」の歌となったのである。空は晴れて星が見えるのに、鷗外の夢の中では春雨の降る音が聞こえていたというのが、詩的である。どことなく、『新古今和歌集』の世界を連想させる唯美的な作風である。

鷗外の歌は、「夜の雨」と「草」を素材としているが、その前の詞書の部分に、「かりいほ」(仮庵)という歌語があるので、おそらく、藤原俊成の名歌、

昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山ほととぎす

を意識しているのではなからうか。これも、『新古今和歌集』に入集した歌である。

5・4 鷗外による賀古の歌の添削例

書簡番号四九七(明治三十八年七月十二日)は、賀古の歌を鷗外が添削して、なおかつコメントを付したものである。右側に賀古の原案を書き、左側に鷗外による訂正を経た決定稿を記す。

遼河

かはみづのいかに流れて通ふらむしら帆占めたり満洲マウのなか原
かはみづのいかに流れて通ふらむしら帆なみ立つ満洲マンシウの原

柳絮

うちけぶる柳は川をへだつれどいつか柳絮リウシュに身も染みにけり
うちけぶる柳は川をへだつれどはな絮ワタ（シジ）に目のまへにとぶ

遼陽に再び来りて

天の川またも蛙のなく声をひたすらめづる野にはきにけり
たちかへりまたも蛙のなく声をひたすらめづる野にはきにけり

鷗外は、①「満洲」を「マス」と発音させることに異議を唱え、「マンシウ」という四音節で詠むべきこと、②「白帆」が「占めたり」という不自然な言葉続きを変えらるべきこと、③「柳絮」には適当な訓読みがないので、「はなわた」あるいは単に「わた」と詠むべきこと、④「身も染む」という表現は意味不明であること、⑤「天の川」はまったくもって意味不明であること、などを指摘している。

確かに、「野辺の秋風身に染みて」とは歌っても、「吹く秋風に身も染みにけり」とは歌わない。一面に白い色彩が埋めているという意味は同じでも、「占めたり」とは歌わない。「天の川」も、賀古としては七月七日の日に詠んだのだから、「蛙」とはどうも結びつかない。

鷗外は、まず先に示したような「最小限の添削」に基づく訂正案を賀古に示す。そのあとで、「最小限ならざる読み直し」の案を見せる。

遼河

くもぎはをうねる遼河は見えねども朝日をあみて白帆なみ立つ

柳絮

野をひろみとほ村柳見えねども身のめぐりにはわた乱れとぶ
江にちるや柳はなわたつりいとにふれてよどみて又ながれゆく

遼陽に再び来りて

歌い直し不可能

鷗外は、直接会って話しをしなくては細かな表現の相談はできないことを愚痴ったあとで、「兄も、新派でも起さんとせらるゝにはあらずや」と、皮肉っている。しかし、こういう鷗外と賀古鶴所との楽しい歌のやり取りが基盤となって、「常磐会」が結成されることになるのである。

5・5 「一尺」の歌

書簡番号五二一（明治三十八年八月八日）には、「拝啓 此頃の御歌、落想いつもおもしろく存候」と、賀古の歌を褒めた後で、「松の御歌を見て小生も」とつづけて、

鉢植の一尺小松雲ぎはに聳り立てりとゆめみけるかな

という鷗外の歌が記されている。賀古鶴所は、「松雲」という号ももっていたから、「小松」と「雲ぎは」という言葉の続き具合は、賀古鶴所（賀古松雲）と関連があるのかもしれない。

賀古は、おそらく「松」の歌を詠み、その中に「一尺」という言葉を用い、「イツシャクと発音したら雅ではないのでヒトサカと発音させたいのだが、それは許されるだろうか」と、古典に詳しい鷗外に質問してきたのだから。鷗外は、「一尺を『ヒトサカ』は紫式部が用ゐし例あり」と、返答している。

紫式部が用いたという「一尺」は、どういう文脈なのだろうか。索引で検索すれば、『紫式部日記』にも「一尺」という用例があるし、『源氏物語』の末摘花巻と東屋巻にもある。ここは、鷗外の読書体験から言って、末摘花巻だろう。醜女である末摘花が、髪の毛だけは長くて美しかったと述べられている有名な場面に、

頭つき、髪の毛の掛かり端しも、うつくしげにて、めでたしと思ひきこゆる人々にも、をさをさ劣るまじう、桂の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかりあまりたらんと見ゆ。

とある。末摘花の髪の毛は、全体で「九尺余り」もあったと、されている。ただし、この箇所は、現在には「イツシャク」と発音する。「イツサク」と訛って発音することも、ないではない。鷗外の時代には、「ヒトサカ」と読んだのだろうか。なお、こ

の「一尺」の発音の仕方については、なお考える余地が残っている。

なお、この手紙に先立つわずか数日前に、鷗外は妹の小金井喜美子に、長い手紙を書いている（書簡番号五一七）。ここで、鷗外は、与謝野晶子『みだれ髪』の中の、

浅き地に扇ながしの都ぞめ九尺のしごき袖よりも長き

髪にさせばかくやくと射る夏の日や王者の花のこがねひぐるま

（引用本文は、鷗外の書簡の表記による）

という短歌を例に挙げて、「九尺」について論じ、自作の、

緋綾子に金糸銀糸のさうもやう五十四帖も流転のすがた

という、「源氏物語」関連歌を書きつける。

そして、晶子の歌を揶揄して、「ひぐるまひまはり」の花なら直径は「一尺」はあるうから、その花を髪に挿す女の顔は「五、六尺」の大きさはなければならぬ、いるとしたら化け物だろう、などと冗談を言っている。

この小金井喜美子への手紙にある「尺」論議が、賀古鶴所に「一尺」の用例は紫式部にもある、と教えた手紙につながったのだろう。ただし、「一尺」を「ヒトサカ」と鷗外が発音した根拠には、なお疑問が残る。

5・6 「酒」の歌

賀古鶴所は、国許から戦場に届けられた「菊正宗の新酒」を、鷗外にも分かち与えた。鷗外は、この酒をとんでも旨いと思つて飲んだ。鷗外は、酒の臭いに敏感だったよう、細かい感想を述べている。賀古へのお礼の手紙には、幸田露伴が試みている「四行詩」にならった自作の四行詩を書き記している（書簡番号五五四・五五六、いずれも明治三十八年十月）。

『鷗外全集』の補注によれば、この酒を届けるに際しての賀古の書簡が残っている。それに、賀古の四行詩と、歌一首が記されている。まず、四行詩の方から。

新酒のうた

ことしぎけ 香にいや多ひて

とくありと 舌うちならし
そのむかし ミワのむまさけ
めでましし 人をぞしのぶ

これは、『万葉集』にある大伴旅人の「酒を讀むる歌」を意識しているのだろうか。「とく」は「徳」。鷗外は、例によって添削し、「むまさけ」の「む」は、中世のさかしらな表記であり、「うまさけ」が正しいとしている。

次に、賀古鶴所の歌。

高粱の枯れ野をわたる秋風に声をのみてぞ驢馬のいななく

「高粱」は、モロコシのことで、「コーリヤン」と発音。「高粱酒」を作る材料となる。驢馬は、高粱の野を吹き渡る秋風にさらされ、「高粱酒」を飲むのではなく、「声を飲んで」、いなないているのであるうよ。「のむ」の駄洒落というか懸詞が、決まっている。洒脱で、粹で、酒を愛した賀古らしい歌である。

しかし、鷗外の採点は厳しい。まず、「高粱の枯れ野」を訂正して、「高粱の苳迹」と改める。次には、「声を飲みてぞ」を、「声をのみてや」と添削。賀古の原案だと、「声を呑んでは」という強調表現となるが、鷗外は「や」とすることで疑問表現（声を呑んだから鳴くのだろうか）へと作り改めたのである。

さらに、賀古の歌の眼目である「のむ」の懸詞にも、「呑声トハ例ノ形容ナルベケレド、ヘンテコナリ」と、厳しい。いささか厳しすぎるように思う。この「声をのみてぞ」という賀古の得意な表現を、鷗外は「咽ぶが如く」あるいは「息絶ゆばかり」などと変更した案を提示したうえで、「イツレモ面白カラズ」と、切つて捨てている。さらには「致方ナシ」として、賀古の原案通りにもどすしかない、とからかっている。いささか、賀古がかわいそうになつてくる。

ということ、鷗外の最終案は、

高粱の苳迹をわたる秋風に声をのみてや驢馬なく

「苳迹」は「カリアト」、「驢馬」は「ウサギウマ」と発音する。

5・7 「帰りにないざ」

鷗外が賀古鶴所に宛てた新酒へのお礼の手紙（書簡番号五六六）に、

旗巻いて帰んなんいざ暮のあき

という、鷗外の俳句が載っている。「帰んなんいざ」は、陶淵明『歸去來辭』の一節、「帰んなんいざ、田園まさに蕪れなんとす」の引用。「カエリナン」が、漢文特有の読み癖で「かえんなん」となっている。「ナミダ」を「ナンダ」と発音するようなものであろうか。

酒を愛した陶淵明への連想と、日露戦争の従軍から一刻も早く帰国したいという思いとを、句に仕立てたもの。これに対して、賀古鶴所も和歌を返してきた。そして、二つの案を示してどちらがよいと思うか、鷗外の意見を尋ねた。それに対する鷗外の返事が、書簡番号五七四（明治三十八年十月二十七日）である。

賀古の原案は、二通り。

いざいなんさらば遼野よ千とせへし高麗の瓦を家づとにして
いざいなん遼野よさらば千とせへし高麗の瓦を家づとにして

「家づと」は、「家苞」で、郷里へのお土産のこと。千年前に作られて今も残っている高麗の瓦を手土産に、「帰んなんいざ故国へ」という望郷の歌である。鷗外は、「我趣味よりすれば、『遼野よ』といふこと、このましからず」と述べて、賀古が示した案を二つとも斥けてしまう。そして、

いざいなん千とせ経ぬてふ高麗人の塚の瓦を家づとにして

という最終決定版を書き記している。「高麗人」は「こまうど」は、催馬楽「石川」にもあるし、『源氏物語』にも何回も使われている歌言葉である。「遼野を去る」という情報量が鷗外の添削例では消滅してしまいが、「高麗人」とあれば読者にはどこを去るかのおおよそは理解可能だというのが、鷗外の見解なのだろう。

5・8 動詞の活用形に関する注意

書簡番号五八一（明治三十八年十一月一日）も、賀古鶴所の歌に鷗外が添削を施したものが、文法的に細かな注意事項を書き記しており、はなはだ興味深い。俎に乗った賀古の作品は、次の三首。

みいくさを日ごとむかへど父君はいかにましけん帰り来まさず

もろともに死なんといひてたちいでし友はうせしをわれのみぞ帰る

夕からすわたる枯野のはてもなしいづこにるばや鳴きわぶるらん

まず、最初の歌。父の無事の帰還を待つ子ども視点から詠まれている。鷗外は、「むかへど」という言葉に異を唱える。逆接の接続助詞「ど」は動詞の已然形に接続する。「迎ふ」ならば、下二段活用なので、「迎ふれど」となるべきだし、「向かふ」ならば、四段活用なので「向かへど」となる。ここは、「迎ふ」なのだから、「迎ふれど」とあるべきだ、と鷗外は言う。その通りだろう。

次に、「いかにましけん」の部分にも、違和感があると鷗外は指摘している。鷗外の古文に関する言語感覚を端的に示している箇所ではなからうか。「いかにましけん」は、「（父君は今）、どうしていらつしやるだろうか」の意味で、普通にはそのままだ理解可能な表現である。決して、文法の間違いだとか、目くじらを立てられる表現ではない。

けれども、鷗外は、「いかにましけん」あるいは「いかにまししか」あるいは「いづこにますか」などとあるべきだと、賀古に諭している。「いかにましけん」「いかにまししか」の「し」は、強意の副助詞の「し」ではなく、サ行変格活用動詞「す」の連用形である。つまり、鷗外は、「父君のお戻りが無いのは今」どうなさっておられるのだろうか」と歌うべきだというのである。訂正の第三案の「いづこにますか」だと、「どこにいらつしやるのだろうか」の意味となる。賀古の「いかにましけん」は表現未熟ではあるが、文法的に間違っていない。かといって、「いかにましけん」「いかにまししか」だと字余りになってしまふし、ぎくしゃくした表現の難は解消されない。「いづこにますか」が、最も無難であろう。

鷗外が、賀古の「歌意」を体現して、歌い改めた案。

日ごとく門辺に立ちて迎ふれどわが待つ父は帰り来まさぬ

二番目の「もろともに」の歌については、鷗外は「詞ニ難ナシ」と述べ、文法的

に誤りである箇所はないし、言葉自体に違和感はないと言う。ただし、次のように歌うのがよいとして、代案を示している。

もろともに死なば死なんとちかひてし友をのこして帰るけふ哉

賀古の歌の「たちいでし」(国を出征した)の部分が、短歌を作るうえで不要だといっているのである。その分、「どうせ戦死するのなら一緒に死のうではないか」という決意の部分に字数を配分して、強調すべきだと、鷗外は言っている。確かに、賀古の原案だと中身がたくさん詰まりすぎていて焦点が曖昧である。一方の鷗外の代案は、「歌の姿」あるいは「歌の調べ」が自然である。

なお、この鷗外の添削した「もろともに死なば死なんとちかひてし」の部分には、はからずも鷗外と賀古鶴所との「男同士の堅い絆」を証明しているかのようだ。上田秋成の『雨月物語』中の屈指の秀作「菊花の契」の男の友情を連想させずにはおかない。

三番目の「夕からず」の歌に関しては、「いづこにるばや」の部分に関して、「いづこ」とあれば「や」ではなくて「か」が普通だと鷗外は言っている。「いづこにるばか」とあるべきだ、というのだ。これは、そうとも言えるし、そうとも言えない。「いづこか」とは言うが、「いづこや」とは言わない。しかし、ここは「るば」が主語なので、「るばや」と歌えないことはない。鷗外の個人的な好み領域であり、彼の言語感覚を照らし出している発言だろう。

ただし、「鳴きわぶるらん」の部分に関して、鷗外が「わぶるらん」ではなくて「わぶらん」とせねばならないと指摘しているのは、文法的に大切な注意事項である。現在推量の助動詞「らむ」は、動詞の終止形に接続する。だから、「鳴きわぶらん」が正しいのだが、初心者は「五七七七七」という定型に当てはめようとしてしまう。「鳴きわぶらん」だと字足らずになるので、賀古のように「鳴きわぶるらん」と連体形接続にしてしまいがちなのだ。

鷗外は、「枯野ノ果ガナイノデ驢馬ガ啼キワブ、即チ啼キ煩フト云フ事、解シ難シ」と述べて、どう歌い改めればよいかわからないと、最終案の提示を放棄している。賀古としては、「武蔵野は果てもなし」などからの連想で歌ったのだろう。すなわち、賀古の意識では、「夕べに鴉が啼いている満洲の野には果てがない」ということと、「野原のどこかで、驢馬が啼いている」ということとは無関係であった。別の言い

方をすると、「鴉」と「驢馬」とに焦点が分裂していた。そこを、鷗外は批判しているのだと思われる。

5・9 「やは」の用法

細かな文法の「テニヲハ」に関する鷗外の注意は、書簡番号五八三(明治三十八年十一月三日)にも見られる。

おほかたの民ををさむる道の枝のくすしのわざもしれる君やは

という賀古の原案に関して、鷗外は「やは」が少し腑に落ちない、と指摘する。この「やは」のままだと、「医師の道にも卓越している君のような人物は、ほかにいるだろうか、いやいやない。君は、本当にめずらしい人間だ」という意味になる。つまり、「反語」である。文法的に間違いではないが、鷗外の言語感覚にはマッチしなかった。それで、鷗外は、「君はも」あるいは「君はや」と感動・詠嘆で歌を言い切った。それが普通だ、とアドバイスしている。

5・10 烟草の四行詩

書簡番号五八六(明治三十八年十一月七日)には、鷗外が賀古の「四行詩」の原案を訂正した文面のみが載っている。賀古の原案は、書かれていない。おそらく、天長節(十一月三日)の日に賀古が誰かから煙草を拝領して、そのお礼に四行詩を詠んだのだが、そのまま送り主に見せる前に、親友の文豪・森鷗外の斧鉞を乞うたのであろう。さて、鷗外による訂正版。

天長節に人の烟草たばこをおこせければ

よき日にぞ 烟草はつきし

しべりあゆ 寒き風ふき

仗ぢやうに立つ 鬚ひげこほりなば

解きてまし こをくゆらして

「烟草はつきし」の部分は、「烟草は来ぬる」でもよい、と述べる。「仗に立つ」

と「こを」の部分に、鷗外による添削があつたのだろう。「こを」は「これを」の意味であると書き添えているし、「仗」に関しても補足説明がなされている。

この贈答からも明らかのように、賀古鶴所は鷗外による推敲を経た詩歌を、自分の作品として他人に示していた。だから、後に発会する「常磐会」においても、事前に鷗外の助言をもらった可能性が、皆無とは言えないだろう。ただし、鷗外に「代作」してもらっているのでは毛頭なく、すべて「原案」を提示している。

ちなみに、書簡番号五九六（明治三十八年十一月二十四日）でも、鷗外は賀古に宛てて、「歌の添削を乞うてくる人が毎日、二、三人はいる。添削料を貰ったら、きつと儲かるのではないか」と冗談を飛ばしているし、「しかし、添削ではなくて、替わりに作ってくれと頼まれれば断固お断りしている」と述べている。

賀古の場合には、新酒を送ったり、白魚を届けたり、「指導料」束脩をきちんとして支払っているし、また「代作」を依頼しているわけでもない。なおかつ、書簡番号五九一（小金井喜美子宛て、明治三十八年十一月十五日）で吐露しているように、鷗外は彼の勤務している司令部に「文事ある人」が一人もいないさびしさを、感じていた。別々の場所で従軍している鷗外と賀古との「文事」は、さぞかし鷗外の心の渇きを癒したことだろう。

5・11 賀古への返歌

書簡番号六一四（明治三十八年十二月二十日）には、

かへし

かたるべきいさをしあらねばかくろひて大木のもとにひとりをらばや

とある。「いさをし」の「し」は、強意の副助詞で、「自分には、誇って吹聴すべき軍功がこれと言っていないので、あの大樹將軍の故事に倣って、大木の下で一人座っていることにしよう」という意味になる。

「かへし」とあるので、賀古鶴所から「贈歌」があつたのだろう。それが、現在伝わっていないのは、残念である。

おそらく、鷗外の凱旋帰国が近づいてきたので、賀古から「帰国したら勲功をすべて自己申告して、出世したらよい」という意味の祝福の歌が送られてきていたのではなかったろうか。それに対して、鷗外は謙遜して見せたのである。

明治三十九年、鷗外は、賀古よりも一足先に帰国する。そして、まもなく賀古も帰国した。日本に戻った二人は、戦地での苦しくも楽しくもあつた歌の日々を基盤として、それを拡大すべく、「常磐会」を興したのである。常磐会は、日露戦争に従軍した二人の友情を「揺籃」としているのである。

5・12 「賀古と鷗外」の合作？

日露戦争後の鷗外の書簡は、減少する。常磐会をめぐっても、鷗外と賀古の間で、出欠の確認などが手紙でなされているが、文学問答はなされない。直接に会って、細かな話ができるようになったからであろう。

そこで、一気に、大正六年に飛ぶ。活字本『常磐会詠草』の最終巻（第五巻）では、大正六年六月の第三百三十回が最後だが、その後も実際にはなお開かれていた。その大正六年十二月六日の賀古鶴所宛ての書簡番号一一二四。

直前の十一月の常磐会は、山県有朋の「新椿山荘」で開かれ、鷗外は新築を祝う歌を、万葉仮名で二首詠み、新邸の未来を寿いでいる（『鷗外全集・第三十五巻』の日記による）。十二月の常磐会は、十六日に同じ椿山荘で開かれた。話を戻す。書簡番号一一二四には、

身をすてし君あれば社（そ）と絶えて久しき国をあはれとはおもへ

という歌を書き記した後で、鷗外は、「先づ、右ノ如ク翻訳仕候。コレニテ井上二御見セナサレテハ如何。若シ鷗外調ヲ発見セバ、謝罪シテヨロシカルベク候」と書いている。この文面の「翻訳」の意味が正確にはわからないが、おそらく次回の常磐会の兼題（あらかじめ決められている題）で、歴史上の忠臣の誰かの名前が提示されてきたのだろう。賀古は、自分の歌のどこかに文法的な自信がなかったので、鷗外に質問した。鷗外は、かつて日露戦争当時のように、言葉を訂正するだけでなく、語順を変えたりして整えてあげたのだろう。それが、「身をすてし」の歌だと思われる。

賀古は、「予選」として井上通泰にこの歌を送りつけるわけだが、鷗外は、「井上には、この歌に私の手が加わっているとは絶対に気づかないだろう。『鷗外調』を意図的に消したからね」と、戯れている。

5・13 文法へのこだわり

書簡番号一一三二（大正六年十二月三十日）も、賀古鶴所宛てだが、賀古の歌を添削したものだと思われる。賀古の原案は、書かれていない。

老ぬれど馬に鞭うち千里をも走らむとおもふ年立ちにけり

翌大正七年の干支は、午年である。それで、新年の抱負を賀古が歌に詠んだのだが、それをそのままの表現で他人に披露してよいかどうか、鷗外に質問してきたのだろう。鷗外は、歌の添削の後で、「原案では、一首の中に『ぬる』が二つあって重複している。はなはだ稚拙であるので、第五句を改めた」旨を書き記している。だから、賀古の歌は、当初、

老いぬれど馬に鞭うち千里をも走らむとおもふ年ぞ立ちぬる

というようなものではなかったであろうか。自分は、老いた驚馬であるけれども、せいぜい「千里の馬」と言われる駿馬を目指して努力し、今年も疾駆したいという気持ちで詠まれている。ちなみに、「走らむとおもふ」の「おもふ」は終止形ではなく、連体形であり、「年」にかかるのであろう。

ただし、完了の助動詞「ぬ」が二度も現れるのは、確かに拙い。そこを鷗外は添削して、難を消してあげたのである。

5・14 『枕草子』談義

書簡番号一四七〇（大正十年十一月）において、鷗外は賀古鶴所と『枕草子』の冒頭部分の解釈について、話し合っている。どうやら、賀古が疑問点について質問し、鷗外が答えているようだ。「金子ノ解釈」が妥当かどうか論点となっている。念のために、『枕草子』の冒頭部分を引用しておく。

春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり。やみもなほ螢飛びちがひたる。雨などの降る

さへをかし。

秋は夕暮。夕日はなやかにさして山ぎはいと近くなりたるに、鳥のねどころへ行くとして、三つ四つ二つなど、飛び行くさへあはれなり。まして雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず。霜などのいと白く、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭持てわたるも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもて行けば、炭櫃、火桶の火も灰がちになりぬるはわろし。

賀古が問題としているのは、秋の長所を述べた「夕日はなやかにさして山ぎはいと近くなりたるに」の部分の解釈である。現在は、「夕日がパアツ」と、はなやかに射ってきて、山際にとても近くなっている時に」というように、「山ぎはに、いと近くなりたるに」と「に」を補って現代語訳するのが普通である。

ちなみに、今引用した『枕草子』本文は、「能因本・流布本」と言われる系統であり、北村季吟の『枕草子春曙抄』などが、この本文系統に従って読んできた。現在の国文学界では、「三巻本」系統が有力になっているが、そちらでは、「夕日のさして、山の端いと近うなりたるに」という本文になっている。

江戸時代から、一般大衆は能因本で読んできたわけで、賀古や鷗外が話題としている金子元臣『枕草子評釈』（大正十年・十三年）も、能因本系統の本文を採用している。だから、先ほどの引用は、現在の古文の教科書に掲載されている本文ではなく、鷗外たちが目にしていた当時の『枕草子』の本文を掲げたわけである。

この箇所解釈の歴史については、萩谷朴『枕草子解環』に詳しいが、大別して「夕日」が「山際に近づく」とする説と、「山際」が「近く見えるようになった」とする説とに、大別される。通説は、前者の方である。「近うなる」の主語を「夕日」と取るか、「山ぎは」と取るか、の相違である。

さて、賀古は、刊行されたばかりの金子の『枕草子評釈』を読んだかどうかして、この通説（金子もこの立場）に疑問を感じたのだろう。言われてみれば、「夕日が山には近づくと」の「に」を省略するのは、日本語としていささか不自然な言葉つきである。そして、賀古は「山の端がこちらにぐっと近づいてくる」という解釈は不可能なのか、質問してきたのだろう。かなり本格的な質問である。賀古の古典力には、あなどれないものがある。

鷗外は、どう答えたか。「山ノ端ニノ意味ニ可有之候」として、通説通り「に」の省略だと結論する。そのうえで、賀古が述べたように、「山の端」を主語とする解釈も「取ラレヌ事ハナク」と、理解は示している。すなわち、「山の端は」あるいは「山の端の」の意味ともなりうる、と妥協している。

解釈がいくつかに分かれていたら、どちらか一方に明解に割り切るのが鷗外の性分だと思いが、この場合には歯切れが悪い。どちらにも取れるが、自分は通説の立場に賛成する、と述べているのが、面白い。

この手紙の当時、鷗外は「皇室博物館総長兼図書頭」という役職にあった。この賀古への手紙も、「図書寮」（現在の宮内庁書陵部）から出されている。鷗外が、図書寮を訪れて、何人かの国文学者に意見を尋ね、「どちらにも取れる」と言われて困惑している様子が、目に浮かんでくる。

5・15 「剣」の歌

書簡番号一四八二（大正十年十一月七日）は、賀古の歌への添削例である。当時、鷗外は、正倉院の宝物の管理のために東京を離れ、奈良に滞在中だった。安田財閥の安田善次郎が刺殺されたのが、九月二十八日。そして、東京駅頭で、平民宰相・原敬が刺殺されたのが、十一月四日である。このため、鷗外は、この手紙の最後を、「原死後ノ状況、奈何」と、賀古に質問する形式で結んでいる。このような騒然たる社会情勢の中で、賀古鶴所が詠んだ歌。

はしなくも剣とりいで、拭ひけり秋のそらより清き刃を

「剣」は、「つるぎ」ではなく、「けん」と音読みするのである。この歌の問題点を、鷗外は三つ指摘する。

- ① 「剣」と「刃」は、一首の中で重複している。
- ② 「はしなくも」という副詞は、日本語として、あまり適切でない。ただし、「つれづれに」（退屈しのぎに）と改めれば、作者の賀古の意図と違ってしまう。

- ③ 「秋の空よりも清い」のか、「秋の月よりも清い」のか、「空」と「月」のどちらが最適か、思案する必要がある。

特に興味深いのは、「はしなく」（はしなくも）に、鷗外が「無端」という漢字を

当てていることである。「おもいもかけず」「はからずも」「偶然に」という意味の副詞であるが、この漢字の語感に『源氏物語湖月抄』などの古典注釈書の流儀なのである。鷗外がかつて注釈書を通して親しんだ古文の語感と、賀古が用いている古語との齟齬について、示唆するものがある。結局、鷗外は、

なにとなくとりいで、又拭ひけり秋のそらより清き刃を

と改作して、あるいは「秋の月よりも」の方がよいかもしいと、書き添えている。この「なにとなく」は「ぼんやり」という意味ではなく、「無性に剣を手に取りたくなって」という激しい情念を感じさせる表現である。

賀古は、原敬暗殺事件などが頻発する世相に触発されて、無性に「壮士」としての気概が掻きたてられた。それを、歌に詠んで、鷗外に示したのである。そのような賀古の男気を、鷗外はよく理解している。

5・16 山県有朋追悼歌

書簡番号一五〇三（大正十一年二月五日）は、鷗外から賀古に宛てられている。この年の二月一日、山県有朋が没した。九日に、国葬が挙行された。山県は、そもそも賀古鶴所を引き立て、森鷗外にも便宜を図り、常磐会の実質的なパトロンとして君臨した人物である。その作る歌は、決して素人のもではなく、文学性を兼ね備えていた。いづれ、山県有朋の歌の文学性については、稿を改めて論じたい。この後ろ盾を失った賀古と鷗外の落胆は、察するにあまりある。鷗外の死去は、この年の七月九日である。

さて、賀古は、山県有朋の生前の恩義に報いるべく、一首の追悼歌を詠んだ。それを公表する以前に、鷗外に目を通してもらったのである。賀古の原案は、正確にはわからない。しかし、鷗外の推敲を経て完成した歌は、

国原のおさへに神のすゑおける千歳の石とおもひしものを

であった。「日本国の支柱」として、「国家の安泰を祈る鎮め石」として、神が地上に遣わしたかのような、山県有朋公。その寿命は、千年も万年も、岩のように永遠のものだと、我々は仰ぎ見ていたのに、今日の別れの日が来るとは、何とも痛恨の

極みである。……

鷗外は、書簡の中で「かなめ」という言葉について言及しているので、おそらく賀古の原案では、「国原のかなめに神のすゑおける」という表現だったのではないかと。鷗外は、「かなめ」はもともと扇の部品だから、ここでは不適当だと判断した。「かにのめ」「かのめ」なら和歌に詠んだ例があるが、今の人にはちよつと意味がわかりにくくなる。また、「しづめ」という言葉を和歌に用いた例は、すぐには思い浮かばない。一方、「おさへ」の用例は『万葉集』などにすぐに見つかるから、「おさへ」という言葉の使用が最適だろう、と結論している。

鷗外と賀古との間で交わされた書簡で、「歌」を含むものは、これが最後となる。

6 おわりに

『常磐会詠草』と鷗外書簡から、賀古鶴所の歌を抜き出して分析してきた。なお、雑誌『萬年艸』などから数首の賀古鶴所の歌を拾うことが可能だが、今は完璧を期しないので、省略させてもらった。

賀古と鷗外は、日露戦争に従軍したが、その従軍中に頻繁に書簡のやりとりをしている。それには、しばしば「歌の贈答」が含まれ、鷗外による賀古の歌の添削指導まで行われていた。

鷗外は、帰国後に『うた日記』という歌集（歌文集）をまとめるのだが、帰国した翌年に早くも賀古と語らって常磐会を始めたことを考えれば、満洲で繰り返された「歌問答」が、常磐会の母胎となっていると言っても過言ではないように思われる。

七歳年長の賀古鶴所は、鷗外の親友として、人生を伴走した。この二人の友情は、『伊勢物語』に見られた在原業平（森鷗外）と紀有常（賀古鶴所）との関係と対応していたし、彼らもそれを意識していたと思われる。

もしそうだとすれば、彼らに庇護を与え、常磐会のパトロンとして「文雅の遊び」に興じた山県有朋は、惟喬親王これたかの役回りだということになる。常磐会は、歌の選が終わった後で、楽しい酒席の場がもたれたという。惟喬親王を中心に業平や紀有常たちが「渚の院」で桜を愛でる『伊勢物語』の世界同様に、椿山荘で山県有朋を中心とするメンバーが歌と酒を楽しみ、時には政治を熱く語っていたのである。

『伊勢物語』の惟喬親王は、政治抗争に敗北した失意の境遇にあったが、山県有

朋は権力の中核にあった。そこが、違いと言えば違いである。

賀古鶴所の歌の表現を鑑賞することで、彼の人間としての度量の大きさが見えてきたように思う。そして、鷗外が生涯にわたって彼に親炙した理由もわかってきたように思う。また、賀古鶴所の歌を添削した鷗外の指摘を細かく見ることで、鷗外のもっていた詩歌観・言語観・古典観・文学観なども、照らし出されてきたのであるまいか。

『常磐会詠草』をめぐるのは、まだ探索すべき問題点がいくつも残っているが、今後の課題としたい。また、鷗外が主宰した「観潮楼歌会」との関係についてもなお考察する必要がある。

最後になったが、本稿を執筆するに際して、文京区立鷗外記念本郷図書館と、東京大学付属総合図書館には、貴重な蔵書の閲覧に便宜を図っていただいた。特に、文京区立鷗外記念本郷図書館長の高橋修司氏と、鷗外記念室担当の大澤恵子氏には、有益な助言をたまわり、多大の恩恵を受けた。関係各位に、心から感謝申し上げます。

Kako Tsurudo and Mori Ogai

Keiji SHIMAUCHI

Abstract

Kako Tsurudo (1855-1931) was a bosom friend of Mori Ogai (1862-1922). They were in the same class of the medical department of Tokyo University, and both became army doctors.

Kako had the confidence of Ogai and therefore he took down Ogai's deathbed injunctions.

Why was Ogai deeply attached to Kako? The friendly feeling between Ogai and Kako is the same as the feeling between Ariwara-no-Narihira and Ki-no-Aritsune in "*Ise-Monogatari*".

Kako and Ogai were both tanka poets. They organized "Tokiwakai", a tanka association headed by Yamagata Aritomo.

First, this paper showed a complete list of Kako's tanka works from "*Tokiwakai Eiso*".

Secondly, it found several distinctive features of Kako's tanka.

Lastly, in analyzing many letters Ogai sent to Kako, it indicates Ogai and Kako's great literary accomplishments.

キーワード：賀古鶴所，森鷗外，賀古桃次，山県有朋，常磐会，『常磐会詠草』，鷗外書簡